きべりはむし

第10巻　第1号

目　　次

三田・能勢地方のギフチョウ	勝屋　　潤	1
宝塚大橋の照明燈で採集した蛾（その3）	新家　　勝	7
兵庫県のテントウダマシ	高橋　寿郎	11
能勢の蛾	仲田　元亮	20
武庫川のヒメジュジナガカメムシ	新家　　勝	22
兵庫県産 Cryptocephalus 属ハムシ 4種の分布について	高橋　寿郎	29
パピリオ属の食樹に関する一記録	勝家　　潤	34
能勢のトンボ　3種	仲田　元亮	35
甲山湿源のネアカヨシヤンマ	田中　　稔	36
宝塚市清荒神のチョウ（追録）	加藤信一郎	36
宍粟郡波賀町水谷の甲虫	高橋　寿郎	37
県関係文献紹介		42
新入会員・住所変更		43・44

兵庫昆虫同好会

1982年5月

三田・能勢地方のギフチョウ（I）
―1981年度分布調査―

勝屋　潤

三田，武田尾地方のギフチョウは，1970年頃までは多産しており，シーズン中の天候の良い日には，30～40人が押しかけていたが，その後開発と乱獲（特に食草の根こそぎ採取）により著しく個体数を減じた。中でも武田尾の大原野周辺は，大がかりな開発が行なわれ，ギフチョウを多産した安場池神社周辺は現在見る影もなく宝塚市指定による「チョウ採集禁止」の立札が立っている。また竜王山の麓一帯も田畑が減少し，食草もなくなってしまった。

最近では採集に訪れる人もまばらで，来た人は大原野で現在飼育，放蝶されているギフチョウを見に来ていると云っても過言ではなくなった。

しかし，武田尾の境野から玉瀬にかけての地域と三田から篠山にかけての地域は減少したと云っても，まだまだ多くのギフチョウが見られる。

一方，能勢地方のギフチョウは昨年大阪昆虫同好会がまとめられた「北摂の昆虫(1)」にも書かれているが，能勢町吉野には若干のギフチョウが残っており，さらに今年は，本会員の仲田元亮さんならびに森地重博さんと共に吉野から離れた地域でのギフチョウも発見できた。

私は，1981年4月～6月に三田から能勢にかけての地域のギフチョウおよびカンアオイ属を調べ各地域のギフチョウの飼育も行なった。1人の1シーズンだけの調査では，不充分極わまりないが一応中間報告として1981年度分の分布調査を報告したい。

1. 調査地域

調査地域は図1に示す通りA点からI点までの9地域である。

A：三田市志手原（兵庫）
B：三田市上野（兵庫）
C：神戸市道場・鎌倉峡（兵庫）
D：宝塚市千刈水源池（兵庫）
E：宝塚市武田尾大原野（兵庫）
F：宝塚市武田尾境野・玉瀬（兵庫）
G：川西市笹部（兵庫）

H：豊能郡能勢町吉野（大阪）

I：豊能郡能勢町豆柏（大阪）

またこの他に兵庫県小野市，西脇市，多可郡中町，黒田庄などの調査も行ったが，本報告文ではこれらの地域は割愛させて戴く。

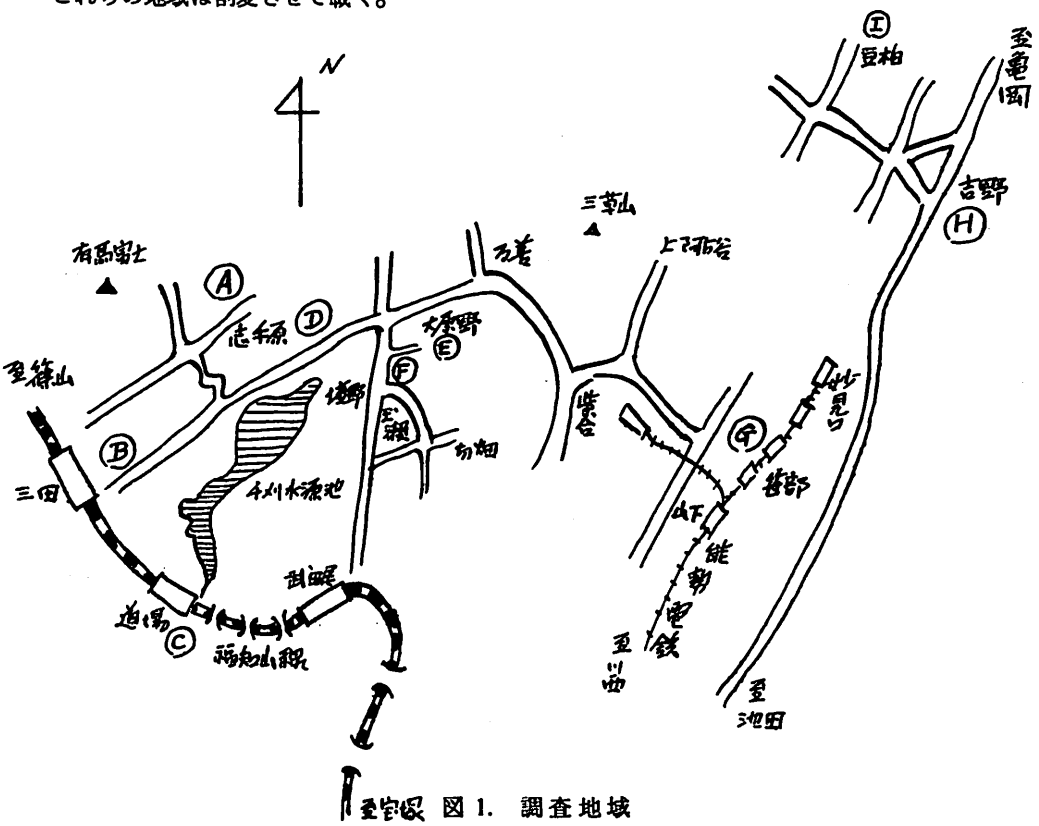

図 1. 調査地域

2. 各地域の現状

A．三田市志手原

水田に面した林縁に早咲きのツツジが咲き，これに数頭のギフチョウが訪れている。武田尾地方ではもう見られなくなった光景であるが，本地域に於てはこういった光景がまだ見られる。

クヌギ，コナラ，ナラガシワの雑木林（二次林）の中にはヒメカンアオイは少なく明るく展けた水田のあぜに多く見られる。

4月18日，他の地域を回った帰りに立寄ったので，時刻はＰＭ2：00を過ぎていたが，この日は晴天無風で気温も高かった為，数頭がツツジで吸蜜しているのが見られた。段々畑に沿って一定の蝶道があるらしく同個体を3度ネットに入れたりしたが，この日，後翅下部の赤紋が完全に黄橙色に置き代った♀を1頭採取した。

4月25日には田のあぜのヒメカンアオイに夥しい数の卵がついており，5月18日に見た時に

は，その卵の半数強の若令幼虫がついていた。

しかしその后，このあぜ一帯に火入が行なわれ，５月２３日に訪れた時には，ヒメカンアオイは完全に消滅していた。多数の幼虫は毎年このようにして全滅し林内のヒメカンアオイで育った少数個体によって種の維持がなされているのである。

しかしこの地も押し寄せる開発の波には打ち勝てず，もうすぐ近くまで宅地増成が行なわれている。

B．三田市上野

三田から千刈水源池に向う途中にはヒメカンアオイが点々と分布している。特に杉などの植林が切られた後の空間には，少ないながらギフチョウが見られる。A点に比して，ヒメカンアオイはずっと少ないが，葉の大きいのがここの特徴で，次の杉苗木植生がいつなのか不明であるが，そうなるとこの地域も全滅の危機がある。

近くのクリ林にはヒメカンアオイは見られないが，ギフチョウは見られ，また倒木の下で蛹殻を１つ発見している。（４月25日）

また河川を横切る個体も見られる。ここにはコツバメが多く，河川沿いのハンノキにはミドリシジミが多い。おもしろいことに千刈水源池に近づくにつれ，少しずつではあるが，ミヤコアオイが見られるようになる。

C．神戸市道場・鎌倉峡

鎌倉峡へのハイキングコースの入口の竹林にはヒメカンアオイが見られる。

しかし，道場のギフチョウはその姿を消して以来，再発見されないままである。

D．宝塚市千刈水源池

千刈水源池にもギフチョウは現在棲息していない。

ここで興味ある事実として，吊橋附近ではヒメカンアオイは見られずミヤコアオイのみ群棲している事があげられる。一般に文献などではヒメカンアオイとミヤコアオイは混成しない事になっているが，三田の混成地およびここのミヤコアオイを地質学的にどう説明されるのか今後検討の余知があるように思われる。

E．宝塚市武田尾大原野

10年前多産していた竜王山の麓と安場池神社の周辺は現在，昔日の想かげはなく，飛翔しているギフチョウはほとんど近くで飼育放蝶された個体である可能性が高い。コツバメやミヤマセセ

リも随分と減ってしまった。 4月11日に訪れた時にはあまりのショックに玉瀬へと足を回したが，4月18日に再度訪れ附近をよく調べてみると道場寄りの斜面に1ケ所ヒメカンアオイとミヤコアオイの混成地がある。そして数頭のギフチョウが見られヒメカンアオイのみから卵が発見され，ミヤコアオイには産卵されていない。

話によるとミヤコアオイを植えている人がいるらしい。ここのもそうかも知れない。しかし私の友人の話では他に1ケ所（つり堀り附近との事）に多数のミヤコアオイを含むヒメカンアオイとの混成地があり，とても人が植えたとは思えないと云う。

私はその場所を確認していないが，とにかく，両カンアオイの混成，分布については三田，道場を含めて調べる必要があると思う。

F．宝塚市武田尾境野，玉瀬

大原野から境野を通って玉瀬に向うと以前なら逆であるが現在はギフチョウの個体数は増えてくる。

境野あたりの田畑や林縁を歩いていても飛び出してくるし，玉瀬には最近人が入らなくなったせいか，かなりの個体数を4月11日，4月18日に確認している。

しかしヒメカンアオイは非常に少なく，ここのギフチョウの生命力に敬服して見つけた卵には手をつけられなかった。

玉瀬から切畑に向うと次第に個体数は減少し，切畑ではもう見られない。

G．川西市笹部

ギフチョウの飼育に際し，三田，武田尾のヒメカンアオイを採取するのは絶滅への道を早めるようなものである。そこで本会員の仲田元亮さんに川西市笹部のミヤコアオイの自生地へ案内して戴き，ギフチョウの分布していない本地域のミヤコアオイで飼育する事にした。

本地域は例え放蝶してもギフチョウが生活していけるだけの日照，空間，吸蜜植物などがなく，ここのミヤコアオイは非常に多いので飼育には一番妥当であると思われる。

H．豊能郡能勢町吉野

4月12日，仲田元亮さんと共に森地重博さんの案内で当地を訪れた。クリ林のほんの一角にしがみつくようにして生きているギフチョウを見た時は胸がつまる想いであった。

数頭目撃したが飛翔は弱々しく，♀にいたっては，この日，目撃した2頭とも羽が伸び切らず，ミヤコアオイにしがみつくように地面を歩行していた。

個体数が少ない為，近縁交配となり累代飼育と同じような結果が出ている様に思われた。

本地域のギフチョウはミヤコアオイのみを食しており，「北摂の昆虫(1)」によれば武庫川流域のものとは異なる系統という事である。おそらく京都系のものであろう。

結局私は1♂のみの採集で打ち切り，羽の伸び切らない2♀はそれぞれ仲田さんと森地さんが持ち帰り産卵させる事にした。

I．豊能郡能勢町豆柏

吉野を訪れた日，我々は豆柏にてギフチョウの棲息を確認する事ができた。恐らく初記録であろう。本地域のものは，（この日3人で採集した個体に関しては），前翅がOリングをなしており興味深い。飼育個体の場合，よくOリングは出てくるが野外産ではそう多くなく，私は今までに武田尾で2ex，採集しているのみである（1970年）。ミヤコアオイは非常に少なくここにも開発の手が伸びている。

本地域に関しては改めて森地さんから発表されるであろうから，ここでは簡単な報告のみとする。

以上の地域をまとめると表1のようになる。

表1. 各地域のギフチョウの食草と個体数

調査地域		食草	個体数
A	三田市志手原	ヒメカンアオイ	◎
B	三田市上野	ヒメカンアオイ	○
C	神戸市道場（鎌倉峡）	ヒメカンアオイ	×
D	宝塚市千刈水源池	ミヤコアオイ	×
E	宝塚市武田尾（大原野）	ヒメカンアオイ	○
F	宝塚市武田尾（境野，玉瀬）	ヒメカンアオイ	◎
G	川西市笹部	ミヤコアオイ	×
H	能勢町吉野	ミヤコアオイ	○
I	能勢町豆柏	ミヤコアオイ	○

◎ 多い
○ 少ない
× 棲息していない

3. ギフチョウの飼育

各地域のギフチョウを使用して，条件別による羽化率を調べる為，表2のようなグループ別けをした。

志手原，玉瀬産は自宅にてヒメカンアオイに産卵させたものであり，吉野，豆柏産は仲田元亮さんのお宅でミヤコアオイに産卵させて戴いたものである。

尚，羽化率については次回に報告する。

表2. 飼育条件と飼育結果（中間報告）

グループ	産地	産卵数*1	蛹化数	食草*3	飼育場所	冬期蛹の保管場所
A	志手原	67	18	ヒメカンアオイ	室内	室内
B	志手原		21	ミヤコアオイ	室内	室外
C	志手原		21	ミヤコアオイ	室外	室外
D	玉瀬	59	19	ヒメカンアオイ・ミヤコアオイ	室内	冷蔵庫
E	玉瀬		15	ヒメカンアオイ・ミヤコアオイ	室外	室外
F	玉瀬		17	ヒメカンアオイ・ミヤコアオイ	室外	室内
G	吉野	30*2	—	————	——	——
H	豆柏	21	5	ミヤコアオイ	室内	室内
I	豆柏		5	ヒメカンアオイ	室内	室外
J	豆柏		4	ミヤコアオイ	室外	室外
K	豆柏		6	ミヤコアオイ	室外	冷蔵庫

*1. 産地に還元した数は省く。

*2. 吉野産はすべて葉表に産卵され，残念ながらふ化しなかったが，森地さん宅では無事ふ化し蛹化している。

*3. ミヤコアオイは一部奈良県金剛山産のものを使用した。

4. ま と め

武庫川流域のギフチョウと能勢産のものは自然状態での食草は異なるが，飼育に際しては全く問題がない。蛹化率も極めて良かった。

ギフチョウの蛹に関しては，一部をもとの産地（三田，武田尾）に還元した。最近はやたら放蝶する人が多く，分布調査は非常にやりずらいが，他地域のものを導入するわけではなく，もとの産地への還元という理由付けで私も一部を放蛹した。

但し，能勢産については今年は全て保管している。

能勢のギフチョウに関しては，仲田元亮さんが，現在執筆中の「能勢の昆虫」（追加，改訂版）に詳しく発表されるであろうし；森地重博さんもまた，この地域のギフチョウを詳しく調べられているので今后，新しい知見が得られると思われる。

私も今後共こういった調査を続けていくつもりである。（1981．11．9）

5. 参考文献

1）日浦　勇：「蝶のきた道」（蒼樹書房）

2）原　聖樹：「ギフチョウの自然史」（築地書館）

3）渡辺康之：「兵庫県武田尾周辺のギフチョウ」（昆虫と自然 14(2)，1979）

4）大阪昆虫同好会：「北摂の昆虫(1)蝶類」

5）宇山喜士：「大阪付近のギフチョウについて」（昆虫と自然 15(5)，1980）

6）橋本セツロー：全国Luehdorfia 情報（TSUISO No.115（1977））

（神戸市垂水区東舞子町18－61－205号）

宝塚大橋の照明燈で採集した蛾（その3）

新　家　　勝

今回は，シャチホコガ科，ドクガ科，カレハガ科，カギバ科，シャクガ科，ミノガ科およびメイガ科について報告する。

Notodontidae　　シャチホコガ科

1. Stauropus basalis　　ヒメシャチホコ

　1979.9.9　　武庫川町

2. Harpyia lanigera　　ナカグロモクメ

　1979.5.6　　武庫川町

3. Naganoea manleyi　　オオトビモンシャチホコ

　1978.10.28　　武庫川町

4. Phalera fuscesens　　ムクツマキシャチホコ

　1979.9.7　　武庫川町

5. Clostera anachoreta　　ツマアカシャチホコ

　1979.5.13　　武庫川町

6. Clostera anastomosis　　セグロシャチホコ

1979.5.23　武庫川町

Lymantriidae　ドクガ科

1. Dasychira argentata　　スギドクガ

1979.10.3　武庫川町

2. Leucoma candida　　ブチヒゲヤナギドクガ

1978.10.11　南口2丁目

3. Lymantria mathura aurora　　カシワマイマイ

1979.7.5　武庫川町

4. Parocneria furva　　ウチジロマイマイ

1979.5.16　武庫川町

Lasiocampidae　カレハガ科

1. Gastropacha populiforia　　ホシカレハ

1979.9.20　南口2丁目

2. Gastropacha querciforia　　カレハガ

1978.9.30　南口2丁目

3. Malacosoma neustria　　オビカレハ

1979.6.6　南口2丁目

4. Dendrolimus spectabilis　　マツカレハ

1979.7.20　武庫川町

Drepanidae　カギバ科

1. Tridrepanda crocea　　ウコンカギバ

1979.10.3　南口2丁目

2. Hypsomadius insignis　　アカウラカギバ

1979.9.21　南口2丁目

Geometridae　シャクガ科

1. Somatina indicataria morata　　ウンモンオオシロヒメシャク

1979.5.23　南口2丁目

2. Scopula superior　　キナミシロヒメシャク

1979.6.10　武庫川町

3. Sauris nigrilinearia　　ウスミドリナミシャク

1980.11.9　南口2丁目

4. Jankowskia athleta　　チャノウンモンエダシャク
　1979.9.22　武庫川町
5. Alcis angulifera　　ナカウスエダシャク
　1978.10.15　武庫川町
6. Alcis grisea　　フタヤマエダシャク
　1979.5.23　武庫川町
7. Megabiston plumosaria　　チャエダシャク
　1978.11.9　武庫川町
8. Gonodontis arida　　エグリツマエダシャク
　1978.11.9　武庫川町
9. Ourapterx nivea　　ウスキツバメエダシャク
　1978.10.18　南口2丁目

Pshychidae　ミノガ科

1. Claniva variegata　　オオミノガ
　1978.10.15　南口2丁目

Pyralididae　メイガ科

1. Herculia nanalis　　コシマメイガ
　1979.11.3　武庫川町
2. Dichocrocis punctiferalis　モモノメイガ
　1979.8.14　南口2丁目
3. Botyodes principalis　　オオキノメイガ
　1978.11.8　武庫川町
4. Calguia defigralis　　ウスアカマダラメイガ
　1979.5.24　武庫川町

Ⅲ　ま と め

以上，3回にわけて報告した「宝塚大橋の照明燈で採集した蛾」について科別の種類数を示すと次のとおりになる。

スズメガ科	8種
ヤママユガ科	4種
ヒトリガ科	7種
ヤガ科	55種

シャチホコガ科	6種
ドクガ科	4種
カレハガ科	4種
カギバ科	2種
シャクガ科	9種
ミノガ科	1種
メイガ科	4種
計　11科	104種

上記の科別の種類数をみるとヤガ科の55種は，他科の種類数に比べて圧倒的に多かった。調査を始めた当初からメイガ科のものがかなり採集できるものと予想したにもかかわらず，4種であり非常に少なかった。

採集品のほとんどが普通種であったが，アトジロキョトウとヨショトウは近畿では数少ない種類である。また，ヤマトホソヤガはこの資料を纏めた1981年1月時点では和名は決定されているが学名は決定されていない種類である。

種類により個体数の少ないものと多いものがある。個体数の少ないものとしてメンガタスズメ，クロスズメ，ブドウスズメは1頭採集しただけで，採集品以外に目撃した個体はない。採集1頭，目撃なしの種類はこれら以外にもあった。

個体数の非常に多かったものとしてハスモンヨトウ，クロクモヤガ，オオバコヤガ，フサヤガ，アカエグリバがある。しかしながら，年によって消長が激しく，ハスモンヨトウおよびフサヤガは1978年は多く，1979年は少なく，1980年は多かった　アカエグリバは1978年は多かったが，1979年および1980年は1頭も目撃しなかった。

宝塚大橋の照明燈は，上流側の歩道と下流側の歩道との2列にわかれて取り付けられており，通常，風下に当る下流側の照明燈に多くの昆虫が集っている。上流側の照明燈に昆虫が多いときは下流から上流へ向って風が吹いている。

以上に報告したとおり，余り努力せずに調査した結果なので纏めて見ると淋しいものになってしまったが，宝塚市内の蛾相の一端は示しているものと思う。調査3年目の1980年には新しく採集する種類が少なくなったが，まだまだ多くの種類のものが採集できるはずであり，今後とも調査を継続し，機会をみてこの紙面をお借りして報告させていただくことにする。

なお，最後になりましたが，ここに記録した蛾の同定に際して東　正雄先生および木下総一郎先生から並々ならぬ御指導と御援助をいただきましたことについて厚く御礼申し上げます。さらに発表をお勧め頂きました高橋寿郎氏にたいしても厚く御礼申し上げます。

兵庫県のテントウダマシ
（兵庫県甲虫相資料・100）

高　橋　寿　郎

日本産テントウダマシ科に就いては中條道夫博士の名著〃日本動物分類，偽瓢虫科〃（1939）がありその当時の日本産の本科のものを全部図説されると共にそれまでの研究史をまとめられている。その後中條道夫，中根猛彦博士，木内盛郷氏による断片的な報文並びに中根猛彦博士による原色昆虫大図鑑による26種の図示（1963）が出ると共に最近になって佐々治寛之博士がこの類の再総括をされた（Mem. Fac. Edu. Fukui. Univ., Ser. Ⅱ, 仏28, Part. 1, 1978., 甲虫ニュース，仏49～仏52, 1980).

佐々治博士によると現在の日本産の本科の種類は6亜科　18属　42種ということになっている。このうち本州に産するのは5亜科，16属，30種である。中根博士は1981年に石垣島，奄美大島産の2新種並びに石垣島からの1新分布種を記録されている（北九州の昆虫，28巻，2号，P.55－58, 1981）. 従って日本産は45種と云うことになる。

生態に就いてもほとんど報告が無いのが現状である。僅に若干の幼虫に就いての報告が林，中村両氏によってなされている位である（ニューエントモロジスト，3巻，1号，P. 26－34，1953）.

兵庫県産のこの類に就いては黒佐博士によって〃日本産偽瓢虫類21種に就いて〃と題する論文の中で神戸市を中心とした9種の本科のものに就いて検討を加えられたのがあるだけである（昆虫界，10巻，97号，P. 152－163，Pl. 2，1942）（断片的，部分的には勿論若干の報告はあるが－）。

現時点での兵庫県産は，19種しか記録出来なく充分とは云えないが一応まとめておきたい。

Family Endomychidae　テントウダマシ科

Subfamily Mychotheninae　マルテントウダマシ亜科

佐々治博士により1978年に Mychothenus 属をタイプとして設立された亜科である（Mem. Fac. Educ. Fukui Univ. Ser. Ⅱ, Nat. Sci, 仏28, P.8－12, 1978). いずれも小形でテントウムシ科の小形のものに似る。腹部第1節に腿節線を欠くことや触角が長いことで容易に区別され日本から6属7種が知られている。佐々治博士によりほとんどの種の図説（1978，1980）がある。またその内の Mychothenus asiaticus ダエンテントウダマシに就いては幼虫の形態の図説もある（佐々治，1978）. 残念なことに兵庫県にはこの亜科のものは2種しか知られていない。小形故注意が足りないのだろうと思う。

Genus Idiophyes Blackburm, 1895　コマルガタテントウダマシ属

1. Idiophyes niponensis (Gorham, 1874)　コマルガタテントウダマシ

本種は Gorham 氏が Nagasaki から Symbiotes 属で記載された種である(氏は Common at Nagasaki in rubbish heaps in winter: probably widely distributed in South Japan と書いている。Ent. Monthly Mag., Vol. 10:225–226, 1874).

1920年 Arrow 氏は Exysma 属に移され(Trans. Ent. Soc. Lond., 1920:25). 1953年に Strohecker 氏によって Idiophyes 属に移された(Genera Insectorum, Fac. 210 Endomychidae. 1953:25).

日本では中條博士(日本動物分類, 偽瓢虫科, P. 181–182, 1939)と佐々治博士によって図説されている(1978, 1980). 分布は本州, 四国, 九州。

県下での産地もほとんど知られていない。まだまだ調べて見なくてはならない種である。

産地:川西市若宮[仲田, 1980]*; 相生市三濃山(6exs., 28–IV–1974).

2. Geoendomychus sp.

三原郡福良から記録されている種。佐々治博士によるとこの亜科に属するいづれかの種と考えられると述べておられる(1980).

産地:三原郡福良[久松, 1973].

Subfamily Mycetaeinae　ホソテントウダマシ亜科

Genus Leistes Redtenbachor, 1845　イツホシテントウダマシ属

3. Leistes decoratus (Gorham, 1887)　イツホシテントウダマシ

Gorham 氏により本州の柏木及び九州のオヤ山産で Panamomus 属で記載された(Proc. Zool. Soc. London, 1887, P. 648, pl. liii, f. 10). 中條博士の図説(1939). 中根博士の原色による図説(1980)などがある。Strohecker 氏によって(1953)Leistes 属に移された。上翅は中央前後, 会合線中央に大きな黒紋を装うのでよくわかる種であるが筆者未採集。分布は本州, 四国, 九州。

産地:美方郡扇の山[高橋, 1976].

Subfamily Stenotrsinae　ムクゲテントウダマシ亜科

Genus Stenotarsus Perty, 1832　ムクゲテントウダマシ属

---

* 産地の所で[ ]の中のものは記録の引用, ( )の中のものは筆者標本所有のもの.

4. Stenotarsus chrysomelinus Gorham, 1887　チャバネムクゲテントウダマシ

Gorham氏により本州の一内及び奈良産で記載された種である（Proc. Zool. London, 1887, P. 644, pl. Iiii, f. 1, 1887）. 中條博士（1939）, 中根博士（1963）,佐々治博士（1980）の図説がある。

兵庫県下からは今迄記録が無く少い種のように思う。

産地：神崎郡大河内町砥ノ峯（1ex., 15-VII-1977）.

5. Stenotarsus internexus Gorham, 1887　クロスジムクゲテントウダマシ

本種はGorham氏により九州の長崎, 柏木産で記載された種であり（I. C.,1887）, 黒佐博士は生駒氏が神戸市東灘区本山町の電燈に飛来したのを採集された標本並びに御自身が摩耶ケーブル高尾駅付近の草原の石の下で採集されたものでもって解説をしておられる（1942）. この摩耶産の標本を佐々治博士は最近再び図説しておられる（1980）. 筆者は未採集である。

産地：神戸市東灘区本山町［1ex., 4-IV-1938, 生駒採集, 谷口, 1942］,摩耶山［1ex., 4-IV-1938, 谷口採集, 谷口, 1942, 佐々治, 1980］.

Genus Ectomychus Gorham, 1887　ケブカテントウダマシ属

6. Ectomychus basalis Gorham, 1887　カタベニケブカテントウダマシ

Gorham氏により本州の河内, 宮ノ下, 栗ケ原及び北海道札幌産標本で記載された種である（I. C.,1887）. 中條（1939）, 中根（1963）, 佐々治（1980）各博士の図説がある。

特徴的な斑紋で区別は簡単である。分布は日本全般だが四国からの記録が無いとのこと。

枯木, Poria（チャアナタケなど）から発見されると云うが筆者未採集。

産地：川西市笹部［仲田, 1978］.

7. Ectomychus musculus（Gorham, 1887）　クロモンケブカテントウダマシ

Gorham氏により九州長崎と本州柏木からStenotarsus属で記載された（I. C., 1887）. 中條博士はこの種と次の種のnigriclavisの卵円形の2種を触角の形状と前背板側溝, 横溝の形状を根拠にStenotarsus属からEctomychus属に移された（Trans. Nat. Hist. Soc. For. 28巻, 182号, P. 394-406, 1938）. 本種も中條（1939）, 中根（1963）,佐々治（1980）各博士の図説がある。分布は本州, 四国, 九州。

茸, 薪（そだ）から採集される。上翅は赤褐～暗黄褐色上翅中央は黒色大斑を存するのでわかりやすい種である。県下で余り産地が知られていない。

産地：川辺郡猪名川町槻並（1ex., 2-VII-1978）. 宍粟郡音水（1ex., 20-VII-1969）.

8. Ectomychus nigriclavis（Gorham, 1873）　チャイロケブカテントウダマシ

本種はGorham氏により産地は明記されていないが"In rubbish heaps: probably

occurs throughout the islands″として Stenotarsus 属で記載された（Ent. Monthl. Mag. IX, P.206-207, 1873）. その後同氏は九州, 長崎を産地として記録している（I. C., 1887）. 分布は本州, 九州である。本種も中條（1939）, 中根（1963）,佐々治（1980）各博士の図説がある。

原記載にも塵埃の堆積せる中より得たとあり, 本山産も塵埃中に見出したものであると。筆者の採集したのは積み重ねられていた材木をのけて採集した。余り多くいる種のようでない。

産地：川辺郡猪名川町槻並（1ex., 4-V-1979）. 神戸市本山［1ex.,18-VII-1938, 谷口, 1942］, 山の街（1ex., 7-VI-1969）.

Genus Saula Gerstaecher, 1858　　キイロテントウダマシ属

9. Saula japonica Gorham, 1874　　キイロテントウダマシ

本種は始め Gorham 氏により Saula nigripes Gerstacher？として Nagasaki. ″Distributed in Nipon and Kushiu″ を産地として記録され（Ent. Month. Mag. ix, P. 206, 1873）, その翌年本種として記載された（I. C., P. 224, 1874）. その記載の中で″It is common″ Mr. G. Lewis″ in South Japan by brushing and beating in summer, but I have not seen in from Hokkaido″とある。

現在の知見では一般に良く知られた種で北海道から九州まで分布して西南日本では普通種と云われている。多くのテントウダマシ類がキノコや朽木で採集されるのに対してこの種は樹木生葉上に生息し, 幼・成虫共にカイガラムシを捕食していて特にヤノネカイガラムシの有力な天敵であると（佐々治, 1980）. 幼虫の形態については佐々治博士の報告がある（Kontyu, 46巻,1号：24-28, 1978）. 図説も多くされている。

兵庫県下では余り普通にいるとは思われないが調査が不充分なのかも知らない。

多井畑産は常緑濶葉樹の一種（椎？）を叩いて得たとあり, サクラの葉裏に発見されるとも云われている。原記載に樟の葉を食害すると記されているが恐らく葉上から得られただけであろうと述べられている（佐々治, 1980）.

産地：Hyogo［Ohta, 1931］. 神戸市摩耶山［Gorham, 1887］, 多井畑［谷口,1942］. 太山寺（2exs., 6-V-1957, 3exs., 3-V-1967）. 相生市三濃山（1ex., 3-V-1974, 1ex., 18-V-1974, 1ex., 16-VI-1974）. 氷上郡［山本, 1958］.

Genus Danae Reiche, 1847　　ダナエテントウダマシ属

10. Danae orientalis（Gorham, 1873）　　トウヨウダナエテントウダマシ

本種は Gorham 氏によって Hiogo 産2頭の標本に基いて新属Coniopodaを設立され, この

種を記載された（Distributed in Nippon and Kiushin とも記されている，1873）．その後同氏は更に九州長崎及び一内と神戸とを産地に挙げ日本産は早春 haystack－refuse の中に見出される由を附記されている（1887）．

現在では Danae 属に取扱れている。北海道，本州，四国，九州に分布している種である。

兵庫県下での産もほとんど知られていない。六甲山麓産のものは早春石の下から見出されたとのことである。

産地：Hyogo, Kobe［Gorham, 1873, 1887, Ohta, 1933］，六甲山麓［谷口，1942］．

Subfamily Eumorphinae　　オオテントウダマシ亜科

Genus Lycoperdina Latreille, 1807　　ツヤテントウダマシ属

11. Lycoperdina（Golgia）castaneipennis Gorham, 1874

クリバネツヤテントウダマシ

Gorham 氏によって日本産2頭の標本（Mr. G. Lewis leg.）で記載された（1874）．その後同氏は日光，佐渡島及び長崎を挙げられ之等の中である種の茸から得られたものがあると付記された（1887）．中條博士はG. Lewis 氏が日光及び佐渡島で採集された3頭の標本で図説された（1939）．中根博士の図説もある（1963）．分布は本州，九州である。

兵庫県下では淡路島の諭鶴羽山では割合採集されているが余り他では個体数は多くないようである。それと山地帯での記録が全くない。摩耶山からの記録は Calvatia craniformis（ノウタケ）から採集されたものであるとのこと。

産地：三原郡諭鶴羽山［久松，1973］．神戸市摩耶山［谷口，1942，柴内，中畔，1950］，藍那（1♀，14－VI－1978）．

12. Lycoperdina（Golgia）dux Gorham, 1873　　フチトリツヤテントウダマシ

本種は兵庫の Maizan, hills（摩耶山）において Puffballs（或る種の茸）から得られた標本で記載された（1873）．その後同氏は横浜を産地として追加し（1887），太田勇愛氏は Hokkaido（Iwamisawa, Nopporo），Honshu（Chuzenji）を記録された（Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. Sapporo, 30巻，4号，P. 226, 1931）．中根博士の図説もある（1963）．分布は北海道，本州，四国である。

兵庫県下では目下の所芦屋市，神戸市内にのみ知られているが須磨妙法寺でピットホールトラップ法で割合採集出来るので落葉下などには広くいるような気がする。

本種の終令幼虫に就いて林，中村両氏の報文がある（ニューエントモロジスト，3巻，1号，

P. 31, Tab. I. II, 1953).

芦屋市の記録は冬季池畔に堆積した枯葉の中に見出したものであり，摩耶山の谷口氏の記録はCalvatia craniformis（ノウタケ）を食していたものであると。

産地：芦屋市内［谷口，1942］. Maizsan, hills Hyogo［Gorham,1931, Ohta, 中條，1939］，摩耶山［谷口，1942］，神戸市須磨妙法寺（2♀♀，11－XI，1978，1♂，7－XII－1978，2♀♀，25－IV－1979）.

13. Lycoperdina (Golgia) manderinac Gerstecher, 1858

セグロツヤテントウダマシ

本種は Gerstecher 氏が香港産で記載された種である（Monogr. Endomychid., P.212, 1858）. Gorham 氏は長崎で記録（1873）し，更に長崎，兵庫，苫小牧を追加された（1887）. 中條博士はG. Lewis 氏採集の長崎産1頭と台湾産3頭その他でもって図説をされた（1938）. 中根博士の図説がある（1963）. 分布は北海道，本州，四国，九州，トカラ諸島，台湾，中国である。

本種は古く Hyogo の記録はあるが現在では川西市，西宮市，神戸市に分布は知られているだけである。他の地域にもいると思われる。神戸市内では前種よりも多いように考えられる。灘区内で Lycoperdon gemmatum（キツネノチャブクロ）から採集されたものがあり，また谷口氏の記録の内多くは石の下に見出したものであると。須磨区内妙法寺産は総てピットホールトラップ法で採集したものである。

林，中村両氏により第5令幼虫が図説されている（ニューエントモロジスト，3巻，1号，P. 30, Tab. I, II, 1953）.

産地：西宮市大和［仲田，1978］. 西宮市香櫨園［谷口，1942］. Hyogo［Gorham, 1887, Ohta, 1931］. 神戸市本山村，灘［谷口，1942］，須磨・妙法寺（1♂，11－XI－1978，1♂，7－XII－1978，3♀♀，26－I－1979，1♂，22－II－1979）.

Genus Ancylopus Costa, 1854　　ヨツボシテントウダマシ属

14. Ancylopus pictus asiaticus Strohecker, 1972

ヨツボシテントウダマシ

本種は斑紋の変異が色々あるようで従来Ancylopus melanosephalus (Olivier, 1808）なる学名が使用されていたが1972年 Strohecker 氏は"The Genus Ancylopus in Asia and Europe"（Pacific Insects, 14巻, 4号, P. 703-708, 1972）なる論文を発表し，種A. pictus (Wiedemann, 1823）のもとに産地別に6亜

種に別けられた。そして日本産は模式産地が中国福建省の subsp. asiaticus Strohecker とされた。この亜種は中国，トンキン，台湾，日本に分布し日本の中に I. J. E. Lewis 氏採集の Kobe産が掲げられている（この辺の経緯は佐々治博士が詳しく述べておられる，1980）.

日本では本州，四国，九州，対馬，南西諸島に産して普通に見られる種である。図説も多くある。

兵庫県下では普通に産する。冬季石下等に集団越冬中のものに遭遇することがある。

一般に地上の倒木下，塵埃下，石ノ下或は雑草の根際等に棲息している。終令幼虫は林，中村氏により図説されている（ニュー・エントモロジスト，3巻，1号，P. 29-30, Tab. II, 1953）.

上翅上の黒色部が変化するので変種名を与えられているのがあるが兵庫県産にはそれ程顕著な変化は見られないようである。

産地：洲本市三熊山，山武牧場〔堀田，1978〕. 川西市大和〔仲田，1970，1978〕. 芦屋市〔谷口，1942〕. 伊丹市，西宮市〔谷口，1942〕. 神戸市神戸大学附近，神戸高校附近，布引，烏原，垂水，瓦木，本庄，魚崎，住吉，御影，本山〔谷口，1972〕，Kobe〔I. J. E. Lewis leg., Strohecker, 1972〕，保久良山（1ex., 12-V-1978），烏原（1ex., 18-VIII-1942, 2exs., 27-VII-1975, 2exs., 14-IX-1981），山の街（1ex., 11-II-1965），広野（1ex., 15-IV-1956），藍那（2exs., 27-VI-1978, 2exs., 27-IX-1978）. Hyogo, Harima, Akashi〔Ohta, 1981〕. 高砂市〔谷口，1942〕. 飾磨郡雪彦山（1ex., 14-VII-1957）. 神崎郡大河内町川上（1ex., 2-VII-1977）. 赤穂市天和（1ex., 6-X-1974）. 宍粟郡音水（2exs., 20-VII-1959, 4exs., 16-VII-1972）. 氷上郡〔山本，1958〕. 豊岡市虫陰，九日市〔高橋，1975〕. 城崎郡香住佐津〔高橋，1975〕.

Genus Mycetina Mulsant, 1846　　ムナビロテントウダマシ属

15. Mycetina amabilis Gorham, 1873　　キボシテントウダマシ

本種は Gorham 氏により Nagasaki, Ipongi 産3頭の標本によって記載された種である（1873）. 光沢の強い真黒な上翅に基部近くと後方に波形黄帯紋がある。原記載に使用した標本の1頭も後方紋が無いむね書いてあり，後方紋は消失するものもあり（f. bumeropicta），全く無紋のもの（f. takahashii）もある。その後 Gorham 氏（1887），太田氏（1931）により産地が追加され中條博士は九州，四国産で図説された（1939）. 中根博士（1963），佐々治博士（1980）のそれぞれ図説がある。分布は北海道，本州，四国，九州である。

兵庫県での産は余り多くいるように思われない。

産地：相生市三濃山（1♀，1-VI-1974）. 宍粟郡赤西（1♀，23-VI-1979），音水

(1♂, 3-VI-1975, M. Yuma leg., 1♂, 21-V-1979). 城崎郡三川山〔高橋, 1975 〕. 美方郡扇の山〔辻, 1963., 辻, 岸田, 1972 〕.

16. Mycetina anchoralis Gorham, 1873　イカリモンテントウダマシ

Gorham 氏により Nagasaki, Hiogo, Yokohama 産で記載された (1873). 上翅にイカリ形の黒紋がある美しい種である。その色彩は変化するとのこと。Gorham 氏は更に肥後, 和田峠, 下諏訪湖, 宮ノ下, 青森を産地に追加 (1887). 中條博士は本州, 九州の標本で図説された (1939). 中根博士 (1963), 佐々治博士 (1980) のそれぞれ図説がある。分布は本州, 四国, 九州で佐々治博士によると堆肥や古くなった藁屋根に多く見られると。

兵庫県下には広く分布しているようだが個体数がそれ程多い種だとも思われない。摩耶山に於てはシイタケ及び松に着生する一種の塊状多孔菌を食すと記録されている。

産地：川西市大和〔仲田, 1978 〕. 兵庫〔Gorham, 1873, Ohta, 1931 〕. 神戸市御影, 摩耶山〔谷口, 1942 〕, 下谷上 (1ex., 11-IX-1979), 有馬 (1ex., 20-VII-1962). 飾磨郡夢前町我孫子 (1ex., 1-VIII-1980). 氷上郡〔山本, 1958 〕. 城崎郡日高山〔高橋, 1976 〕. 美方郡扇ノ山〔辻, 岸田, 1972 〕.

17. Mycetina laticollis Gorham, 1887　ムナビロテントウダマシ

Gorham 氏によって "Kashiwagi, Nara, Maiyasan" 産でもって記載された (1887). 中條博士は上記基本標本の一部と九州若杉山産1頭で図説をされた (1939). 中根, 佐々治両博士の図説がある (1963, 1980).

前背板が巾広く, 長さの2倍以上あり, 側縁が弧状で前後に狭まることで区別がし易い種である。

兵庫県下では摩耶山での記録以外ほとんど知られていない種である。

産地：神戸市摩耶山〔Gorham, 1887, 谷口, 1942 〕. 養父郡氷の山 (1ex., 26-VII-1956, T. Takahashi leg., M. Chujo det. 標本中條博士保管).

18. Mycetina rufipennis (Motschulsky, 1860)　ベニバネテントウダマシ

Motschulsky 氏により Endomychus 属で記載された (Etud. Ent. IX, P.18, 1860). 基本標本の産地は北海道, 函館或はその近傍だろうとのこと (中條, 1939). Gorham氏は G. Lewis 氏の採集品によって日光及び函館を記録すると共に Phaeomychus 属を設立してこれに属せしめた (1887). 太田氏は北海道野幌を加え (Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ., Sapporo, 30(4): 223-224, 1931), 中條博士は G. Lewis 氏の日光での採集品3頭と九州祖母山産2頭で図説された (1939). この種も中根, 佐々治両博士の図説がある (1963, 1980). 現在では Strohecker の主張している Mycetina 属の種として取扱れている (1951, 1953). 分布は北海道, 本州, 四国, 九州に広く分布するが兵庫

県での記録は余りない。

産地：氷上郡柏原市上小倉〔山本，高橋，1962〕．宍粟郡音水（1ex.，13-VII-1958，1ex.，20-VII-1969）．養父郡氷の山（1ex.，25-VII-1959）．

Subfamily Endomychinae　　テントウダマシ亜科

Genus Endomychus Panzer, 1795　　テントウダマシ属

19. Endomychus gorhami (Lewis, 1874)　　ルリテントウダマシ

本種はG. Lewis氏がKawachi産標本で記載された種で（Ent. Month. Mag. XI, P. 55, 1874）．その後Gorham氏（1887），太田氏（1931）等により産地が追加され，中條博士は各地産で図説された（1939）．この種も多くの図鑑に図説されている。日本特産種のようで北海道，本州，四国に分布（九州産は別亜種）していて，日本産テントウダマシ類中最も普通で上翅は藍紫色の光沢をもつ美しい種である。九州産ではこの光沢がなく点刻がこまかく不規則になることからsubsp. kyushuensis Sasaji, 1978として区別されている（Mem. Fac. Ed. Fukui Univ., 仮28, Part. 1：25-26, 1978）．

兵庫県下でも茸から発見され，この仲間の内でヨツボシテントウダマシと並んで個体数の多く，分布の広い種であるが本種の方がより普通に産する。

本種の終令幼虫は林，中村氏により図説されている（ニュー・エントモロジスト，3巻，1号，1953）．

産地：洲本市先山〔久松，1973〕．川辺郡猪名川町上阿古谷〔仲田，1970，1978〕．川西市能勢（4exs.，5-XI-1977），大和，笹部〔仲田，1978〕．神戸市六甲山〔2exs.，4-VIII-1965），山の街（1ex.，1-XI-1956），金剛童子山（1ex.，4-VI-1956），谷上（1ex.，7-V-1963），烏原（13exs.，14-V-1972，2exs.，26-V-1974，4exs.，5-VI-1976，1ex.，11-VII-1976），藍那（4exs.，22-V-1978，5exs.，29-V-1978，3exs.，14-VII-1978，1ex.，7-IX-1978）．Harima〔Ohta，1931〕．多可郡加美町三谷（5exs.，29-IX-1974，1ex.，13-IX-1975），鳥羽（3exs.，19-VII-1975，3exs.，6-IX-1975）．神崎郡大河内町川上（15exs.，18-VI-1977，1ex.，3-IX-1977）．朝来郡（1ex.，8-VII-1956）．相生市三濃山（2exs.，8-VI-1974）．宍粟郡音水（5exs.，20-VII-1959），赤西（5exs.，5-IX-1978）．氷上郡〔山本，1958〕．出石郡出石町中村〔高橋，1963〕．城崎郡城崎（1ex.，25-X-1978）．養父郡氷の山（1ex.，26-VII-1956，T. Takahashi leg.，in M. Chujō's Coll.）〔高橋，1975〕．美方郡扇の山〔辻，1963.，辻，岸田，1972〕．

以上兵庫県産テントウダマシ19種に就いてその分布を眺めて見た。全般に材料が少くもっとき

め細い調査をすれば種類数も増加するだろうし産地も増えるものと考えられる。まだまだ調査の序の口程度のことしかわからないのが現状だと考えている。

（15-I-1982）

能　勢　の　蛾

仲　田　元　亮

ガソリン発電機と白布と捕虫用ランプといった道具を，友人の車につみこんでもらって，何度か山の中へ出かけてみました。

おかげで，いくつかの蛾を手にすることができました。今回は，その中から，スズメガ科のものについてお知らせしたいと思います。

スズメガ科　Sphingidae

1. エゾシモフリスズメ　Meganoton scribae

1980年8月9日，大阪府豊能町青貝山附近，捕虫用ランプ，1ex.

2. サザナミスズメ　Dolbina tancrei

1979年7月21～22日，兵庫県猪名川町木間生（大谷）捕虫用ランプ，1ex.

1980年8月9日，大阪府豊能町青貝山附近，捕虫用ランプ，1ex.

1980年9月6日，兵庫県猪名川町上原水銀灯，1ex.

1980年4月27日，兵庫県川西市笹部（笹部駅）螢光灯，1ex.

1981年8月22日，兵庫県猪名川町内馬場捕虫用ランプ，2exs.

3. ホソバスズメ　Oxyambulyx ochracea

1980年8月9日，大阪府豊能町青貝山附近，捕虫用ランプ，1ex.

4. トビイロスズメ　Clanis bilineata tsingtauica

1979年8月18～19日，大阪府豊能町青貝山附近，捕虫用ランプ，2exs.

1979年7月21～22日，兵庫県猪名川町木間生（大谷）捕虫用ランプ，1ex.

1980年7月5日，兵庫県川西市大和　ライト・トラップ，1ex.

1980年7月12～13日，兵庫県川西市芋生　捕虫用ランプ，4exs.

5. モモスズメ　Marumba gaschkewitschii

1979年8月18～19日，大阪府豊能町青貝山附近　捕虫用ランプ，2exs.

1980年7月12～13日，兵庫県川西市芋生　捕虫用ランプ，1ex.

1980年8月9日, 大阪府豊能町青貝山附近 捕虫用ランプ, 1ex.

1981年8月15日, 兵庫県川西市大和, 1ex.

6. クチバスズメ Marumba sperchius sperchius

1979年7月21~22日, 兵庫県猪名川町木間生(大谷)捕虫用ランプ, 1ex.

1979年8月18~19日, 大阪府豊能町青貝山附近 捕虫用ランプ, 1ex.

1980年7月12~13日, 兵庫県川西市芋生 捕虫用ランプ, 2exs.

1981年8月22日, 兵庫県猪名川町内馬場, 1ex.

7. ウンモンスズメ Callambulyx tatarinovii japonica

1979年8月18~19日, 大阪府豊能町青貝山附近 捕虫用ランプ, 2exs.

1980年8月9日, 大阪府豊能町青貝山附近 捕虫用ランプ, 1ex.

8. エゾスズメ Phillosphingia dissimilis dissimilis

1979年7月21~22日, 兵庫県猪名川町木間生(大谷)捕虫用ランプ, 1ex.

9. スキバホウジャク Hemaris radians

1980年7月27日, 兵庫県猪名川町杉生新田, 1ex.

10. オオスカシバ Cephanodes hyalis

1981年9月7日, 兵庫県川西市大和, 1ex.

1981年9月16日, 兵庫県川西市大和, 1ex.

11. クルマスズメ Ampelophaga rubiginosa rubiginosa

1979年6月28日, 兵庫県川西市笹部(笹部駅)螢光灯, 1ex.

1979年8月18~19日, 大阪府豊能町青貝山附近 捕虫用ランプ, 1ex.

1980年8月9日, 大阪府豊能町青貝山附近, 捕虫用ランプ, 3exs.

12. ブドウスズメ Acomeryx castanea

1979年8月18~19日, 大阪府豊能町青貝山附近 捕虫用ランプ, 1ex.

1980年8月9日, 大阪府豊能町青貝山附近, 捕虫用ランプ, 1ex.

13. ホシヒメホウジャク Gurelca himachala

1979年9月22日, 兵庫県猪名川町杉生新田, 1ex.

14. ホシホウシャク Macroglossum pyrrhosticta

1978年9月24日, 大阪府豊能町初谷, 1ex.

1979年9月22日, 兵庫県猪名川町杉生新田, 1ex.

1979年10月28日, 兵庫県川西市若宮, 1ex.

1980年9月2日, 兵庫県篠山町上篭坊, 1ex.

1980年9月16日, 大阪府能勢町天王, 1ex.

1980年9月21日, 兵庫県篠山町上篭坊, 1ex.

15. ベニスズメ　Deilephila elpenor lewisii

1980年8月9日，　兵庫県猪名川町杉生新田　クヌギ樹液，1ex.

1981年8月1日，　兵庫県川西市笹部　クヌギ樹液，1ex.

16. コスズメ　Theretra japonica

1969年6月30日，兵庫県川西市大和　ライト・トラップ，1ex.

1979年7月1日，　兵庫県川西市大和　ライト・トラップ，1ex.

1980年6月3日，　兵庫県川西市笹部（笹部駅）螢光灯，1ex.

1980年6月21日，兵庫県猪名川町杉生上　水銀灯，2exs.

1980年8月9日，　大阪府豊能町青貝山附近　捕虫用ランプ，4exs.

1981年8月22日，兵庫県猪名川町内馬場　捕虫用ランプ，1ex.

17. ビロウドスズメ　Rhagastis mongoliana

1980年8月9日，　大阪府豊能町青貝山附近　捕虫用ランプ，2exs.

武庫川のヒメジュウジナガカメムシ

新家　勝

I はじめに

ヒメジュウジナガカメムシ Trotidothorax belogolwi Jakovlev は，体長9㎜内外，朱紅色に黒色紋がある美しい小型のカメムシである。北隆館発行の日本昆虫図鑑には，本州に産し，稀なものではあるが，時には大群をなすことがあると記されている。なお，前記図鑑に記載の学名 Lygaeus elegans Distant は現在，前記学名に変更されている。また，現在，北隆館から発行されている原色昆虫大図鑑Ⅲにはジュウジナガカメムシは記載されているが，ヒメジュウジナガカメムシ（以下，本種という）は記載されていない。本種は中国にも産するが，日本では全国的には普通種でなく，県下での採集例は少ないとのことである。また，大阪府下での採集記録はないとのことである。一方，筆者は，幼小時から武庫川周辺（注1参照）に住み，長年その生物に親しんできたところ，幾度かその大群に遭遇することができたので，この間にわかった範囲での本種の生態について中間的に報告させていただく。

注1. 武庫川研究会発行の武庫川をさかのぼるによれば，武庫川は兵庫県東南部に位置し，丹南町，三田市，宝塚市，伊丹市，西宮市，尼崎市を流れる本流の全長約70キロメートルの二級河川であると記されているが，この報告における武庫川は宝塚大橋から下流約15キ

ロメートルの部分に限られている。

Ⅱ 観察結果

筆者が初めて本種を採集したのは，1942年10月，阪神電鉄武庫川鉄橋から武庫川橋間の東岸の堤防であった。当時，堤防斜面に生えているいる蔓性植物に，赤と黒のきれいな小形のカメムシが，数百頭程度（推定）の大群をなしているのを発見した。きれいなカメムシであることおよびカメムシのこのような大群をこれまで見たことがなかったことから興味を持ち，採集して同定したところ本種であることがわかった。ただし，その蔓性植物が何であるかは確認しなかった。

次に本種を目撃したのは，1955年10月，甲武橋下流の西岸の堤防であり，前述同様の大群を目撃した。今回は，採集しなかったが，本種が群棲する蔓性植物がガガイモ（注2参照）であることを確認した。そして，本種の食草がガガイモであることに間違いはなく，ガガイモなら武庫川川敷のような草地には，よく生えている植物であり，おそらく本種は武庫川川敷に広く分布しているであろうと予想した。

注2. 北隆館発行，牧野富太郎著の日本植物図鑑によれば，ガガイモはヒルガオ科と同亜目に属するガガイモ科の蔓性多年性草本であり，カモメヅル（ジュウジナガカメムシの食草）もまたガガイモ科の植物であることが記されている。

更に，1978年8月19日，同年9月23日，同年10月10日，1979年8月19日および同年9月15日に，宝塚新大橋下流東岸の堤防のガガイモの葉上で小数ではあるが本種を発見した。なお，8月中に目撃した個体には交尾中のものがいた。なお，1942年の採集標本が破損したことに対する補充と宝塚市内における採集例としての記録のため1978年8月19日に2頭採集し，標本とした。しかしながら，本種のこの生息地は1979年末から1980年初めにかけて行われた河川改良工事のため，工事中は水路と化し，工事後に復元されたがガガイモは全滅してしまった。そこで，新しい生息地を探すつもりでいたところ，1980年7月27日，仁川合流点付近の堤防上のカワラサイコの花で本種が吸蜜しているのを目撃した。カワラサイコの花には，ヒメアカタテハ，キチョウ，ツバメシジミ，オオセイボウ，ヒメハラナガツチバチなど数多くの昆虫が次々に吸蜜のため飛来していたが，本種もまた，これらの昆虫に混じって一つの花でしばらく吸蜜すると，他の花に移り，やがてどこかへ飛び去っていくなど実に活発に動き回っていた。

前述のとおり，筆者は，本種が武庫川川敷に広く分布していることを知っていたので，髙橋寿郎氏に報告したところ，その観察記を本誌に寄稿してはどうですかと勧めていただいた。そこで，更に詳しい観察が必要になったのであるが，特定の昆虫に目標を定めて生態を観察するのは初めてなので，1981年は比較的容易な分布状態調査から始めることにした。それでも，1981年7月16日から年末まで，休日には欠かさず本種の観察を行なったので，少なくとも武庫川およびその周辺における本種

の分布状態および生態のかなりの部分を知ることができた。食草たるガガイモを傷付けないことおよび群を分解させないことを配慮し過ぎたためか，産卵場所，産卵個数など明らかにできなかったことも多いが，従来からの観察結果をも含めて，これまでに明らかになったことを中間的に纒めると次の通りになる。

(1) 食　草

武庫川における本種の食草はガガイモである。ガガイモと接近して生えている他の植物上にいることが度々あり，特にガガイモの落葉後およびガガイモの葉を吸汁により枯れ上がらせた後にヤブカラシ，カナムグラ，ウリ科の雑草上などで大群をなしていることがあるが，吸汁しているのを見たことがなく，吸汁の跡もないので，おそらくガガイモ科以外の植物は食草にならないと思われる。カモメヅル，イケマなどガガイモ科の他の植物は，武庫川に生えていないので，食草になるかどうかを確認していない。

(2) 生息地

本種の生息地はガガイモの生えている日当りのよい草地であり，平地でも斜面でもよい。大きな木の影になり日当りの悪い所にはいない。また，日当りが良過ぎて乾燥が激しくガガイモがじゅうぶん発育しない所，河川改良工事や下水道工事のためガガイモが壊滅状態になり，復活後じゅうぶんに生育していない所，人家に近いためおよび不法耕作のためガガイモが絶え間なく刈り取られる所など人手の加わりやすい所にもいない。

(3) 分　布

公園化，運動場化，不法耕作およびコンクリート護岸が進められていない所などで，前項のような所であれば，本種が生息している可能性がある。1981年に調べたところでは，宝塚新大橋から下流にガガイモの生育場所が19箇所，そのうち本種の生息可能な所は18箇所あり，そのうち9箇所に本種が生息していた。しかしながら，1942年および1955年に本種を採集ないし目撃した所には，ガガイモはなく，本種もいなかった。以上，本種の生息を確認した所は，行政区画上，宝塚市，伊丹市，西宮市および尼崎市へまたがっており，本種は武庫川川敷に広く分布しているといってよい。なお，武庫川へ流入する河川中，武庫川同様，日当りの良い草地の多い天神川および天王寺川にはガガイモは生えていず，本種もまたいなかった。

(4) 吸　汁

吸汁は通常，葉裏で行われるが，莢でも行われる。ただし，莢での吸汁は新芽の部分に限られるが，葉裏での吸汁は，成長した葉においても行われる。ガガイモの葉には，小さい群の吸汁後は淡褐色の斑点ができ，大群の吸汁後は完全に枯れ上る。濃緑色のガガイモの葉が，このように変色している所またはその付近を探せば，本種を見付けやすい。

(5) 吸　蜜

本種が吸蜜するのを確認した植物は，カワラサイコ，ヤブカラシ，ガガイモおよびセイタカアワダチソウである。これらの植物の花上で吸蜜していたのは，すべて成虫であった。幼虫は葉裏で生活することが多く，しかも飛べないため，これらの花に接近する機会が少ないのに対し，成虫は飛ぶことができるため吸蜜の機会を得やすいものと思われる。ガガイモ，ヤブカラシおよびセイタカアワダチソウは小さい花が群がって咲いており，これらの花の間を歩き回って吸蜜している。カワラサイコでは同じ枝先に咲いている花で吸蜜する場合を除き，他の枝または他のカワラサイコで吸蜜する場合は飛んで回る。ヤブカラシやセイタカアワダチソウはガガイモと同じ場所に生えているのに対して，カワラサイコは生育場所を異にするので，かなりの距離を飛んで来て吸蜜する。

(6) 習性のいろいろ

本種の生活は，単に日光浴をしているときおよび越冬態勢にはいったときなどを除き，主としてガガイモ上で営まれる。産卵場所および夏期における若い幼虫の生活場所は未確認であるが，3令程度以下の幼虫は夏期にはガガイモの葉裏におり，終令幼虫は成虫同様，葉表や蔓先に出て来る。ただし，秋期に日光浴が盛んな頃は若い幼虫も葉表に出て来る。

成虫は夏期においても葉表や蔓先にいることが多く，吸蜜のためガガイモおよびその他の植物の花上にいることもある。なお，天候が悪いときは成虫，幼虫共，葉裏に隠れている。また，脱殻が見られるのは葉裏である。葉表にいる個体を驚かせると，葉裏へ逃げる。更に追いかけると，蔓を伝って地上へ降り，地上を歩行して逃げる。極度に驚くと，ガガイモからばらばらと落下するが飛び去ることはまずない。以上，本種は主としてガガイモ上にいるのではあるが，時にはフタホシカメムシと同様，地表にいることもある。

夏期に本種は盛んに交尾している。交尾中の個体をシャーレなどに生け捕りにすると，驚いて離れるが，しばらくするとたちまち交尾を始める。秋期の大群棲では，ほぼ同数の雄および雌が見られるが，交尾は見られない。秋期に発生した成虫は，越冬後に交尾するものと思われる。幼虫のまま越冬した個体は，越冬後，成長すれば交尾するであろう。

本種はよく日光浴をする。夏期に葉表や蔓先に出て来て，日光に当っているのは成虫および終令幼虫であるが，9月にはいり，気温が下り始めると，若い幼虫まで葉表に出て来る。10月にはいり群棲が頂点に達する頃になると，天候が良ければ，成虫およびほとんどの幼虫が葉表に出て来て日光浴をする。そして，11月になってガガイモの葉が黄変し，更に落葉し始めても天候が良ければ，集団でまたは個別に日光浴している。更に12月にはいってからでも，天候さえ良ければ幾らかの個体は日光浴をしている。

(7) 群　棲

群棲している本種をガガイモの葉ごと容器に取り込むと，驚いてばらばらになるが，しばらくす

ると一緒に取り込まれたガガイモの葉上に元通り群を作る。群棲は，本種の生態上の著しい特徴である。そこで，最小単位と考えられる小さな群中の個体数を調べてみたところ，大体３０頭余であった。大群の個体数を野外で一頭ずつ数えるのは不可能であるため，目分量で概算したところでは数百頭を下ることはないであろう。７月下旬から８月中旬頃には，前記のような小群の幼虫群が単発的に見られ，成虫になると共に交尾し，群は分解してしまう。この時期，本種がいた所に秋期に必ずしも発生するとは限らず，逆にこの時期にいなかった所に秋期に発生している所がある。夏期に羽化した個体は，必ずしも発生場所にとどまるものではなく，かなり移動するようである。大群が見られるのは秋期である。次に１９８１年の秋に観察した大群の発生状況を紹介する。

１９８１年8月2日（以下，１９８１年を省略する），天神川合流点附近の堤防で約7m×約15m程度のガガイモの多生地を発見した。ここは，ガガイモの群落とはいえないものの，ヤブカラシ，セイタカアワダチソウ，ヨモギ，ウリ科の雑草と共に多くのガガイモが混生していた。本種の成虫があちらこちらのガガイモにおり，あるものは，ヤブカラシの花上で吸蜜していた。ここはガガイモが多く生えているが，極力，傷付けることがないよう踏み込まずに外から観察することにした。しかしながら，ここもまた不法耕作やごみの不法投棄が間近に迫っていた。

８月３０日，成虫は１頭もいないが，３０頭程度の幼虫群や１００頭程度の幼虫群が合わせて数群，ガガイモの葉裏にいるのがみられた。幼虫の大部分は３令ないし４令幼虫と思われたが，１令ないし２令と思われる若い幼虫もおり，１００頭程度のやや大きい群ではこれらの幼虫が混棲しているものがあった。このように令数の異なる幼虫同志が群棲するのは面白いことだと思った。

９月６日，幼虫の成長と合わせて幼虫群も拡大しており，濃緑色であるガガイモの葉の中に，激しい吸汁のため白っぽくなったものが目に付いた。

９月１３日，幼虫の成長と群の拡大は更に進んでおり，既に数百頭からなると思われる大群も見られた。吸汁のため枯れ上ったガガイモの葉が目立ち，大群はガガイモだけでなく混生する他の雑草上にまであふれ出し，これらを伝って，まだ吸汁していないガガイモの葉へ移動しているのも見られた。

９月２３日，既に終令幼虫になったと思われる幼虫が多数おり，吸汁は激しくなる一方，９月にはいって気温が下り始めてからはガガイモの成長が止っているので，吸汁によるガガイモの葉の枯れ上りは，この場所の全域に広がって来た。孤立した１本のガガイモの葉を完全に吸汁し尽した１群が，地上を歩行して他のガガイモへ移動するのも見られた。このようになって来ると，吸汁されてないガガイモに幾つもの群が重なり合い，大群が形成される。

９月２７日には大多数の幼虫が終令幼虫になったものと思われた。１０月３日には小数ではあるが成虫が見られたが，大部分の幼虫は終令幼虫であり，所によっては２令程度と思われる若い

幼虫も見られた。数百頭を越すと思われる大群が3群のほか幾つかの小群が，この場所に散在していたが，必ずしもガガイモの葉上にいるとは限らなかった。そして，日中は吸汁せず，日光浴にふけっていた。ガガイモの新鮮な葉は僅かになってしまったが，群の拡大もまた見られなくなった。10月10日には群の数および大きさは10月3日と変わりはないが，大多数の個体が成虫になっていた。

10月18日になると気温がますます下り，群は縮少し始めていたが，まだ幼虫のままのものがいた。10月25日にはガガイモおよびガガイモ周辺の雑草上にいる群は，数十頭程度の小群にまで縮少していた。更に，11月3日には，残り少ないガガイモの葉が，黄変し始め，成虫および幼虫それぞれ十数頭からなる小群が1群のほか単独の成虫が散在するだけになった。11月8日には，僅に残っていたガガイモの葉の大半は落葉し，ガガイモおよびその周辺の雑草上には十数頭の成虫が散在するだけになった。

当初，ガガイモのどこかの部分に産卵されたおそらく30～40個の卵から孵化した幼虫は，そのまま群棲し，よく見られる最小単位と思われる30頭余の小群を形成するものと思われる。夏期には群が多発しないので，群が拡大することはまずないが，秋期には群が多発することがあり，特に食草が少ないときに群の重なり合いが起きて時には大群を形成する。そして，令数の異なる幼虫群同志および幼虫群と成虫群でも重なり合う。夏期には羽化後，群は分解するが，秋期には羽化後も群棲のまま場所を変えて越冬態勢にはいる。

(8) 越　冬

前述の通り，1981年に本種の大群が発生した場所は，ごみの不法投棄場所に近く，空きかん，バイクの泥除け，電気掃除機の破片などいろいろの固形ごみが捨てられていた。ガガイモおよびその周辺の雑草上の群棲の縮小後，晴天の日にはこれらの固形ごみの上で群棲して日光浴しているのが見られるようになった。11月15日は，バイクの泥除け上で，目分量で約300頭が群棲して日光浴をしていた。これらのごみ上にいるのは主として成虫であるが，4令ないし5令幼虫と思われる幼虫も混じっていた。そして，晴天の日には表面に出ており，曇天の日には裏面や構造の透き間などに隠れていた。また，11月15日に対岸の仁川合流点附近の生息地において，捨てられた新聞紙上にやはり約300程度の成虫群が日光浴していた。この場所は，8月11日頃まで成虫が見られたが，その後，秋期に群棲の形跡さえ見られなかったところであり，対岸の大発生場所から飛来したのではないかと思われた。以上のように，食草であるガガイモから離れた本種は，節食することなく，日光浴をしながら越冬にはいって行く。初冬にはいった12月6日，ガガイモは完全に落葉し，その実が開口して種子が飛散し始めており，ガガイモおよびその周辺の雑草上には，ほとんど本種はいなくなったが，晴天だったので前記のごみ上では，やはり多数の個体が日光浴をしていた。しかしながら，以後，気温の低下が進むにつれて晴天であっても前記のごみ上で日光浴する個体は

減って来た。そこで，12月20日，十数頭が日光浴している電動機カバーと思われるごみを持ち上げたところ，その下に数百頭の群が隠れており，本種の越冬の姿態を見ることができた。また，同日，種子が詰ったまま地表に垂れ下ったガガイモの実の中に，小数の成虫および幼虫がもぐり込んでいるのを発見したが，これもまた，本種の越冬の一つの姿態と思われた。なお，この状態を撮影するためこの実を持ち帰り，日当りの良い場所に置いていたところ，動きが活発になり，実の表面で吸汁行動を始めた。前日の雨のため，この実はかなり湿っていたので，幾分かの水分を吸い取っていたかも知れない。

1月および2月の厳冬期の生態は未観察であるが，12月末までの観察結果からは次のことがいえる。本種は食草が枯れ始める頃から，風当りが少なく，日当りの良い地表のごみなどの下または中で，越冬態勢にはいる。主として群棲しているが，単独のものもおり，成虫が主体であるが小数の幼虫も含まれている。気温が余り低下しない間は，晴天であれば日光浴をし，吸汁することはまずないが，食草の実の中などで越冬しているものは，適度の湿気があり，気温が上ると吸汁行動をすることがあり得る。温度変化の少ない北側また西側の土地また樹中で越冬する昆虫の多いことと比べて，日当りが良く温度変化が大きいと思われる所で越冬することも，本種の習性の一つの特徴であろう。

(9) 発生時期

本種の成虫は大体，7月下旬に発生し，以後，12月末まで見られるが，最も数が多いのは秋期の羽化が盛んに行われる10月中旬である。幼虫はこれらの成虫の発生時期およびそれ以前において見られる。なお，年間を通しての観察が完了すれば，越冬した個体の出現時期およびこれらが産卵することによって発生する幼虫の発生時期も明らかになるであろう。

Ⅲ まとめ

以上のとおり，武庫川における本種の生態の一部について，中間的に報告したわけであるが，本種の生態の特徴はやはり群棲および群棲状態のままの日光浴と越冬であろう。しかしながら，まだまだわからないことが多いので，1982年も観察を続けて行き，その結果もまた本誌上で報告したい。今後の観察課題の主なものをあげると，産卵の時期，場所および個数，各令幼虫の大きさ，形状，斑紋および期間，大群中の個体数，雌雄の個体数の割合い，厳冬期の越冬状態，ごみの下などでない本来の自然のままでの越冬場所，越冬後の状態など数多くあるので，これらを観察し終るまでまだかなりの期間が必要である。一方，武庫川における本種の生息地は，先にも述べた通り，公園化，河川工事，不法耕作などのため，いずれも破壊される恐れが多分にある。幸いにも，食草であるガガイモは，初冬になるとその特有の形状をした淡褐色の実から，長い白毛を持った褐色の種子を飛ばし続けるので，武庫川のどこかで生育し続けるであろう。従って，本種もまた，ガガイモと共に武庫川のどこか

で生き続けるであろう。しかしながら，何とか今以上，生息地が破壊されることがなく，武庫川がいつまでも本種の楽園であることを願っている。

最後になりましたが，本種の同定について大変なご教示をいただきました大阪市立自然史博物館の日浦　勇氏およびこの観察記の寄稿を勧めていただきました高橋寿郎氏に心からお礼を申し述べます。

参考文献

北隆館，日本昆虫図鑑.

北隆館，原色昆虫大図鑑Ⅲ.

北隆館，牧野日本植物図鑑.

武庫川研究会，武庫川をさかのぼる.

兵庫県産 Cryptocephalus 属ハムシ4種の分布について
（兵庫県甲虫相資料・101）

高　橋　寿　郎

ツツハムシ属（Cryptocephalus）のハムシ類は日本にも多く産し（現在35種3亜種が知られている），中にはルリツツハムシ，クロボシツツハムシのように大変良く知られた普通種をも含んでいる。よく見れば斑紋のあるもの色彩の美しいものもいて仲々採集しても楽しい。兵庫県下にも，16種産することが知られていて全部に就いて分布状況を説明すれば良いがそれは次にゆずるとして今回はその内の4種（キベリクロツツハムシ，キボシツツハムシ，オオクロスジツツハムシ，ジュシホシツツハムシ）に就いて県下の分布状況を眺めて見ることにしたい。

○ Cryptocephalus limbatipennis Jacoby, 1885　キベリクロツツハムシ

本種はJacoby氏により1885年 Shimonosuwa（Suwa Lake）産1頭によって記載された（Ent. Trans. Soc. Lond., 1885：199）. その後Gressitt, 木元両博士は〃支那・朝鮮のハムシ〃のモノグラフを発表された中に本種の分布としてE. China（Shantung, Fukien, Kiangsi）を掲げられてなぜか日本をあげておられない（Pac. Ins. Mon., 1A：130, 1961），同時に中條博士がC. yanoi としてLao Shan, nr. Tsingtao から記載された種（Mushi, 11：161, fig. 1. 1938），それにPic 氏がC. klapperichi として Fukien から記載された種（Soc. Ent. Mulhouse, Bull. 1954：54）を共に本種のシノニムとされた。

同じ年中條道夫・木元新作両博士は〃日本産ハムシの目録〃を発表（Pacific Insects, Vol. 3, 広1：134, 1961）された中で今度は分布日本（本州）として収録され同時に東 正雄氏が大阪の岩湧山から1♂で記載されたC. bilineatus Linnaeus の var. moriwakii (Konchu Kenkyu, Vol. 3, 広2：29, 1 fig. 1940)を本種と同一種として取扱れた。

木元博士はタイプをBritish Museumにおいて調べられて黒色味がかった個体であるとされ東氏の var. moriwakii はこの種そのものであるとされている（Kontyu,Vol.29：165, 1961). 確にC. bilineatus（Linnaeus）は全く違った種である。

中根博士は原色昆虫大図鑑，Ⅱで本種を図説された（pl. 163, f. P. 326, 1963）が分布は本州とのみになっている。

木元博士は1964年に〃日本及び琉球諸島のハムシ〃をまとめられた際本種を図説された，この時は本種の分布をE. China, Japan（Honshu, Kyushu）とされておられる（Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ., Vol. 13, 広1：156, 1964).

以上が大体本種に就いての分類学的文献のすべてゞあると考えられる。案外と図説されていない種で比較的少い種なのではないかと思っている。食草，生態などに就いては全く知られていない。現在の分布はE. China, Japan（Honshu, Kyushu）で良いのではないだろうか。

兵庫県下での記録は次の如く大変少い（記録の内筆者採集並びに標本保存のものについてのみデータをつけた）。

産地：川辺郡猪名川町杉生新田〔仲田, 1979〕. 宍粟郡音水（1ex., 21-V-1972）. 氷上郡柏原〔山本, 1953, 1958, 木元, 1964〕. 養父郡氷の山（1ex., 25-Ⅶ-1950）.美方郡浜坂町〔高橋, 1975〕.

筆者の採集所有している標本の内音水のものは木元博士のものによく似ていると云うことは中根博士の図説されたものにも似ているし，東氏の図説されたものにも似ていることになるが氷の山産のものはさらに黒色がかって四つの黄斑を有する程度のものでこちらの方こそ変種としたい様な状態である。

○ Cryptocephalus perelegans Baly, 1873　キボシツツハムシ

本種は長崎産でBaly 氏により新種記載された（Ent. Soc. Lond. Trans. 1877：88）. 1955年には後藤光男氏によって鹿児島県佐多岬産が原色で図説された（原色日本昆虫図鑑,上, 甲虫編）. 分布は本州・四国・九州とのみになっている。5～7月頃得られるが少いと。

中條・木元両博士の〃日本のハムシ目録〃では分布を日本（本州, 九州, 屋久島, 口之江良部島）として食草をコナラ，ハハソまたはナラとして記録された（Pacific Insects, Vol. 3, 広1：135, 1961）.

中條博士は奄美大島，石垣島，西表島のものをvar. insulanus として記載され（Nat. Hist.

Soc. Formosa Trans. 25:72, 1935), 後之を亜種と扱って記載され(Taiwan Mus. Quart Jour. Vol. 7, No. 1, No. 3/4: 197, 233, 1954), 同時に台湾から subsp. takasagonus を新に命名された(I. C., PP. 225-227).

中根博士は原色で本種を図説された(原色昆虫大図鑑, Pl. 163, f. 22, P. 326, 1963). その中で奄美諸島, 台湾のものを subsp. insulanus と扱われた。食草としてはナラ, クスノキ, カエデ, カンコノキ, モクタチバナをあげられ分布は本州, 九州, 南西諸島, 台湾となっている。

木元博士は"日本及び琉球諸島のハムシ"をまとめられた際, 中條博士が宮古島から記載されたC. takahasii (Nat. Hist. Soc. Formosa, Trans. 25:73, 1935)を本種のシノニムとして処理された(Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ., Vol. 1:152, 1964). 同時に分布を台湾, 琉球諸島(宮古, 西表, 石垣, 沖縄, 奄美大島, トカラ諸島), 日本(本州, 四国, 九州, 屋久島, 種子島, 口之沖良部島)としておられる。C. takahasii は中根博士は独立種として図説され(I. C., pl. 163, f. 23)ているが大野氏は後 forma と取扱れた。大野正男氏は"日本産ハムシ科名彙の中でこの種の取扱を整理された(東洋大学紀要, 第13号, 1971).

その後木元博士は南西諸島におけるこの種の斑紋の変化に就いて図入りで詳しく報告され(昆虫, Vol. 42, No. 3, 1974. 南の島の生きものたち, 1979), 与那国島産に新に subsp. yonaguniensis を命名された。

竹中英雄氏も原色で図説されクスノキ, ナラ, カエデ, モクタチバナ, イタドリを食べると解説されると共にイタドリ, クリの枯れ葉, 新葉をとわず食べ成長したと述べておられる(学研中高生図鑑, 昆虫, II, 1975).

以上が大体の本種に就いての分類の経緯である。即ち原亜種と2亜種6型が日本から知られているが本州, 九州から南の島々, 与那国島にいたり台湾に迄分布している種と云える。

やゝ南方的な種のようなのであるが本州に於ける分布がどんなものか余り資料が充分でないので調べなかった。たゞ兵庫県下での分布は今迄ほとんど知られていない種のようなのである。

筆者は戦前(1940)本種を神戸・鳥原で採集していた。当時出版された平山修次郎氏の原色甲虫図譜(Pl. 51, f. 45, P. 168)でC. bissexsignatus Suffrian モンマダラクビカクシハムシと同定した。併し分布が台湾とだけあるので充分同定に自信がもてず当時の台北帝大の中條道夫博士に御尋ねした所C. bissexsignatus はアッサム, シッキム, ビルマ以外台湾に産するか否か不明にて台湾産でこの学名を使用されていたものはC. luteosignatus Picであるとの御返事を頂きいずれにしても本州からの記録の無い種として1941年自刊した"神戸鳥原甲虫誌, 改定版"に収録しておいた(Fauna British India, Coleop. Chrysomelidae, Vol. 1:242, 1908にC. bissexsiginatus が図説されている。成程全く違った種である。当時この文献所有していなかった)。

台湾にはC. luteosignatus も本種C. perelegansも分布している。平山氏の図説されているのはどう見てもC. perelegans だと思われる。従って戦前採集していた標本もC. perelegansである。原産地が長崎であるが本州からの記録は当時は勿論無かったと考えてよいと思われる。

C. luteosignatus の方は最近〃中国経済昆虫誌，第18冊，1980〃 の中に原色で図説されている。だいぶ違う種のように思われる。

近畿地方からは奈良県のMt. Gomanodanの記録が見られたが（Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 仏17, 1964），その他の記録は一寸見られなかった。岡山県での産も見られなかったが広島県では記録がある（すずむし，Vol. 16, 仏1, 1966）．それによると東京附近の山でも採集出来るが近畿以東のものは別亜種と考えられ原亜種としては広島辺りが北限に近い産地と云えようとあるが神戸にも多く産し，奈良あたりにも産するようなので本種の分布はもっと東に延びているのではないだろうか（最近，平野幸彦氏がまとめられた〃神奈川県の甲虫〃の中で小田原で記録され，きわめて珍しい，南方系の種とされている，1981）．

ただ兵庫県では最近飾磨郡家島での記録が報告されたがそれ以外は神戸市内の烏原が知られているのみなのである。但し烏原には6～7月コナラの葉を網ですくうと可成り多く得ることが出来るので恐らく県下の産地はもっともっと他にも広くあると考えている。神戸産のものは原亜種のもので斑紋の変化は今の所見られない。県下の記録は次の通りである。

産地：飾磨郡家島［上田，1981］．神戸市烏原（1ex., VII-1940, 1ex., 3-VII-1966, 1ex., 4-VII-1971, 1ex., 5-VI-1976, 1ex., 12-VI-1980, 1ex., 14-VI-1980, 1ex., 4-VII-1980, 1ex., 17-VII-1980, 1ex., 19-VII-1980, 1ex., 16-VI-1981, 1ex., 27-VI-1981, 3exs., 1-VII-1981）．

○ Cryptocephalalus scitulus Baly, 1873　オオクロスジツツハムシ

本種はBaly 氏によりHiogo（on oak）産で命名記載された種である（Ent. Soc. Lond., Trans. 1878:89）．1940年には平山修次郎氏が北海道，本州，九州に産するとして東京産標本で和名をカシハサルハムシとして原色で図説された（原色甲虫図譜）．1955年には後藤光男氏が分布，日本全土として長野県産の標本を原色でカシワサルハムシとして図説された（原色日本昆虫図鑑，甲虫編）．中條道夫博士は詳しい図説を1956年にされている（図説，食葉はむし類）．分類学的には中條，木元両博士（1961），木元博士（1965）の報文があり，中根博士は原色昆虫大図鑑で図説された（1963）．

竹中英雄氏は1975年 原色で図説をされている。この中でクリ，コナラ，カシワの葉などを食べ

夜間灯に集まることもあると記しておられる（学研中高生図鑑，昆虫，Ⅱ，甲虫）．

一般的にカシワツツハムシとして良く知られている種である（本報文での和名は大野氏によった，1971）．日本特産の種のようであるが分布は広いようである。

兵庫県下の分布も割合広く知られている。ただあまり一度に採集出来ず散発的であったが1981年波賀町の水谷に行った時カシワを注意して見ると割合多くいることがわかった。

産地：三原郡諭鶴羽山〔久松，1974〕．川西市大和〔仲田，1978〕．Hiogo〔Baly，1873〕．神戸市六甲山（1ex.，10-Ⅶ-1955），布引（1ex.，17-Ⅴ-1959），鳥原（1ex.，27-Ⅶ-1974）．氷上郡柏原，神楽村〔山本，1953，1958〕，城崎郡但馬〔高橋，1975〕．宍粟郡波賀町水谷（6exs.，17-Ⅶ-1981），音水（1ex.，15-Ⅶ-1973）．養父郡氷の山（1ex.，24-Ⅶ-1956）．美方郡扇ノ山〔辻，1963.，辻，岸田，1972〕．

○ Cryptocephalus tetradecaspilotus Baly，1873　ジュウシホシツツハムシ

本種はBaly氏により長崎産で新種記載された種である（Ent. Soc. Lond. Trans. 1873：39）．中條博士は1934年台湾からこの種を記録された（Journ. Soc. Tropic. Agr. Taiwan，Ⅵ，3，1934）．それ迄本種の日本からの記録をした文献は8つ程あるがいづれもBaly氏の原記載の引用のようである。

草薙忠明氏は1936年四国より始めて本種を記録され（昆虫界，Ⅳ，27，1936），中根博士は野尻湖畔産で本州から始めて記録された（昆虫界，X，1942）．

中国からは中條博士（Mushi，XIV，2，1942）並びにChen氏の報告があり（Sinensia，XIII，1-6，1942）．更にGressitt，木元両博士の報告がある（Pac. Ins. Mon. 1A，1961）．台湾からは中條博士の詳しい報告が出ている（Taiwan Mus. Quart. Jour. 7，3-4，1954）．

日本では1955年後藤光男氏による原色での図説があらわれ（若干図が悪いが――，原色日本昆虫図鑑，上，甲虫編），中條，木元博士の目録（1961），中根博士による図説（1963），木元博士の論文（1964）がある。

竹中英雄氏は1975年原色で図説され本種の生態はよくわかっていないがイタドリで成長するのではないかとされている（学研中高生図鑑，昆虫，Ⅱ，甲虫）．

本種は日本（北海道にはいないようであるが――），台湾，支那に広く産し，兵庫県下でも可成り分布は広いようである。たゞし1度に多く採集することが出来ないが川西市内では多産するところがあるようである（仲田，1979）．

産地：洲本市安来町〔堀田，1959〕．川西市一の島居寒天干場〔木元，日浦，1971〕，東畦野寒天場〔仲田，1979〕．Kobe〔木元，1964〕，神戸市鳥原（1ex.，25-Ⅶ-1958），

大池（ 1ex., 3－Ⅷ－1940）. 神崎郡大河内町川上（ 1ex., 23－Ⅶ－1977）. 朝来郡段ケ峯〔木元, 日浦, 1964〕. 氷山郡柏原〔山本, 1953, 1958〕. 出石郡床尾山〔高橋, 1963〕, 養父郡氷の山（ 2exs., 25－Ⅶ－1955, 1ex., 27－Ⅶ－1956）. 美方郡鉢伏山〔高橋, 1975〕.

（Ⅷ－1981）

パピリオ属の食樹に関する一記録

勝　屋　　潤

パピリオの食樹について最近観察した記録を簡単に報告しておく。

1. モンキアゲハ

淡路島などでは栽培されているダイダイ，ユズ，ミカン等に発生するが神戸市に於ては須磨鉢伏山，一ノ谷などではカラスザンショウについている多数の卵，幼虫を観察しており，能勢妙見山でもカラスザンショウで発生していた。

神戸市垂水区は本種が多く見られるが，自宅附近は海岸線に極めて近くカラスザンショウは見当らないのでミカン類で発生しているのだろうと考えていた。1981年8月に自宅附近の人家のカラタチに産卵中の2♀を発見した。この時の卵を持ち帰り，ユズとサンショウで飼育した（1981．9羽化）。その後，自宅の鉢植えのユズに発生しているのを確認している。

2. キアゲハ

今までに観察したものは西宮市，神戸市，淡路島，能勢などすべてセリ科植物であったが，1981年8月に上記モンキアゲハの発生したカラタチで5令幼虫4頭を観察した。

文献等ではミカン科につく事があると書かれているが，筆者が確認したのは初めてであった。

その後，卵，若令幼虫も1981年9月に観察している。

飼育に際してはミカン科，セリ科とも普通に食する。

3. カラスアゲハ

能勢地方では，ほとんどコクサギに発生している。また須磨鉢伏山ではモンキアゲハに混ってカラスザンショウで発生している。

飼育に関してはミカン，ユズ，サンショウ，ダイダイなどどれもよく食する。

1981年9月上記のカラタチに産卵中の1♀を採集。3卵と共に持ち帰り，ユズとサンショウに産

卵させようとしたが，失敗した。

3卵は現在越冬蛹となっている。

従って自宅附近のカラタチで見られるパピリオは，上記3種にクロアゲハ，ナミアゲハを加えて5種となる。

4. ミヤマカラスアゲハ

自然状態において普通にみられるのはキハダがほとんどであるが，須磨鉢伏山に於てモンキアゲハ，カラスアゲハに混って，たまに幼虫がカラスザンショウで発見され，また能勢妙見山ではカラスザンショウで発生しているが，筆者は能勢初谷でコクサギより3令幼虫を得ている（1970～1974）。

5. オナガアゲハ

能勢初谷などではほとんどコクサギについているが，1981年10月に川西市笹部でイヌザンショウより3令幼虫2頭を得た。飼育はユズ，ダイダイ，サンショウ，カラタチなどを普通に食し，現在1蛹が越冬中である（1頭は寄生）。

6. クロアゲハ

文献等では，まれにコクサギで発生するとあるが，カラタチより得た3～5令幼虫にコクサギを与えても，かじるだけであまり食さなかった。

7. ナガサキアゲハ

最近，西宮市，芦屋市，神戸市などで人家のダイダイ，ミカン，ユズなどで発生しているが，筆者はまだ神戸に於いて発生源をつきとめておらず，飛翔中の1♂を目撃したのみである。

（神戸市垂水区東舞子町18-61-205号）

能勢のトンボ3種

仲田元亮

近頃は，めについたトンボを採ってかえることにしています。種類は，まだまだといったところですが，その中から3種だけひらいだしてみました。

○ ムカシトンボ　　Epiophlebia superstes

1981 5 5,　兵庫県猪名川町杉生新田，1ex.

○ グンバイトンボ　　Platycnemis foliacea sasakii

1981 7 5,　兵庫県川西市笹部（初谷川附近），2exs.

1981 7 12,　兵庫県川西市笹部（初谷川附近），1ex.

1981 7 15,　兵庫県川西市笹部（初谷川）　多数をみる。

1981 7 26,　兵庫県川西市笹部（初谷川）　多数をみる。

○ ハツチョウトンボ．　Nannophya pygmaea

1979 7 8,　兵庫県猪名川町杉生新田，4exs.

1979 7 21,　兵庫県猪名川町杉生新田，4exs.

1979 7 27,　兵庫県猪名川町杉生新田，4exs.

1980 8 9,　兵庫県猪名川町杉生新田，♀ 1ex.

甲山湿源のネアカヨシヤンマ

田　中　　稔

1980年8月23日西宮市甲山湿源にてネアカヨシヤンマ Aeschnophlebia anisoptera の産卵を観察したので報告する。雨の上った午後3時頃，湿源内に本種の♀が飛来した。始め1 m程の高さを飛びながら産卵場所を捜していたがやがて，バサバサと羽音をたててわずかに水が滲み出ているコケ，粘土状の土にとまり10秒程産卵をして飛び立った所を採集した。30分程の合計4♀が飛来して同じ様な所に産卵をした。ハッチョウトンボが多い水の少い所に，本種の産卵は意外な気がした。

宝塚市清荒神のチョウ（追録）

加　藤　信一郎

1981年10月4日正午，メスグロヒョウモン Damora sagana ilona Fruhstorfer 1♀を採集したので報告する。採集場所は自宅裏の小さい池沿いの小道で，低木の間を縫うように緩やかに飛んでいた。夏眠後の採品なので後翅端が若干欠けているが，鱗粉の脱落はさほど目立たない。

メスグロヒョウモンはヒョウモン類としてはそれほど珍しいものではないが，どこでも普通に見られ

るチョウではない。主として樹林周辺や山地の路傍に見られ，平地や草原には生息しない。当地では偶産種と思われる。これで清荒神で確認された種は４１属５３種，タテハチョウ科は１３種となる。

宍粟郡波賀町水谷の甲虫
（兵庫県甲虫相資料・102）

高　橋　寿　郎

波賀町の原，赤西，音水，引原の各地域は豊富な昆虫（甲虫）相でその調査に訪れる人も多く，また数多くの報文も発表されていてその概略が逐次解明されつゝあることは大変喜ばしい次第である。これ等地域と丁度反対側（引原川をはさんで東側）は道谷附近をのぞいては，ほとんど調査されていないのが現状であろうと思われる。幸１９８１年7月１２日蜂谷幸雄氏の御好意で水谷を訪問することが出来，そこでの甲虫の調査をすることが出来た。特に珍しいものはいないのだがこの地域からの甲虫相に就いては全く無いことから此処に記録を発表しておくことは強ち無意味でもないと考えあえて発表させて頂くことにした。末文ではあるが，この調査の機会を与えて下さった蜂谷幸雄氏に厚く御礼申しあげる。

甲虫相の概説

この波賀町水谷は国道２９号線を姫路から北方，波賀町有賀と上野の接する地点を引原川から別れて水谷川に沿って東北に入り，下水谷，水谷の部落を経て奥水谷に行く手前で右折道路は可成り舗装された所を山の上にあがる。車は標高８００メートル近くまで行ける。この道は先の地点に迄通じていないとのことであった。従って或る地点迄で引き返さなくてはいけないようである。

山の頂上迄杉の植林地域で，一方は視界も開け水谷の部落がよく見えて来晴らしい状況である。標高７５０メートル位の地に可成り広い湿地帯が広がり，その中を渓流が流れていて大変状況のよい所であったが何分にも足場が悪く，そのあたりの調査がほとんど出来なかった。

時間をかけて調べると面白そうである。植相は広葉樹がほとんど見られないし，原生林的なものもなく伐採材の集積場所とか台場のような地点も見当らなかったので，これ等甲虫類の集る恰好の場所が無く充分の調査が出来なかった。したがって杉植林に囲れた比較的単純な植相での甲虫相と考えられた。たゞもう少々時間をかけると違った面での甲虫相もわかると考えられる。

採集出来た甲虫は２９科９６種（若干の未同定種がある）だった。まずもって余り特徴の無い平凡な甲虫相を呈していると云うことが，今回の調査ではわかった。特に注意しなくてはならない様な種も見られなかった。僅か１日の調査であるから（時間的制約もあった）ほんのこの地域での甲虫相の入口に

立った程度であるが何分にも県下からこの地域の甲虫の報告は皆無なので，以下各科目毎に気付いたことを記録しておき度いと思う。たゞ目録的なものは頁数の関係で省略して普通種に就いては和名のみを記した。また全部の種名の後の活弧内の数字は当日の採集個体数である。

○ ハソミョウ科　　Cicindelidae

ヒメハンミョウ Cicindela elise (5). 平地性で川原などにいたり，海浜近くにいる種と云うことであるが，県のほゞ中央部で標高800メートル近くの所に多くいたことは注目された。

ニワハンミョウ(2). 余り多く見られなかった。内1頭は道路の側溝を歩いていて背面のほとんど黒い個体だった。ハンミョウの方は注意したが見られなかった。

○ オサムシ科　　Carabidae

ヤコンオサムシ Apotomopterus yaconinus (♂)。道路を歩いていた1♂を採集。他のオサムシは注意したが見つけられなかった。

ミヤマメダカゴミムシ Notiophilus impressifrons (2). 杉林内で杉の枝打ちが実施された後だったので枝が転がっていた。それを除いた下で2exs. を採集。もっと探したら多く採集出来る環境であった。本種は県下では余り産地の知られていない種である。

アトボシアオゴミムシ(1). クロヒゲアオゴミムシ(1).

○ ハネカクシ科　　Staphylinidae

オサシデムシモドキ Apatetica princeps (2). 葉上に見られた。本種は兵庫県下での記録が案外少い(Sharp 氏により摩耶山と山本氏の氷上郡があるだけ)。ツマグロアカバハネカクシ Hesperus tiro (1).

○ クワガタムシ科　　Lucanidae

このあたりは針葉樹，杉主体の林相で広葉樹が大変少く，クヌギ，ニレ，ヤナギ等が余り見られないのでこの仲間の産出は少いようで全く見られなかった。丁度歩いている前方に飛来して仰向けにひっくり返ったコクワガタ1♀を採集しただけである。

○ センチコガネ科　　Geotrupidae

このあたりであるからオオセンチコガネがいると考えられたが糞が全く見出せないので遂に採集出来なかった。センチコガネ Geotupes laevistriatus 1♀が側溝にいたのを採集した。

○ コガネムシ科　　Scarabaeidae

糞虫類はセンチコガネの所でのべた様に動物の排泄物が全く見られないので採集出来なかった。何処かにいると思われるのだが――。樹液に集るカナブンとか Protaetia の類が見られないし，

杉の樹ばかりなのにスジコガネ，オオスジコガネも見つからなかった。ドウガネブイブイとかコガネムシも注意したが見られなかった。ノリウツギの花が咲いているのでオオトラフコガネの期待もあったが駄目だった。ヒメアシナガコガネ(1)．ハイイロビロウドコガネ(1)．ヒゲナガビロウドコガネ Serica boops と思われるものを見つけたが採り逃した。マメコガネ(2)．ヒメスジコガネ(5)．ツヤスジコガネ Mimela dificilis(1)．ツヤコガネ Anomala lucens(9)．セマダラコガネ(7)．ナガチャコガネ(1)．アオハナムグリ(3)．コアオハナムグリ(1)．

○ タマムシ科　　Buprestidae

シロオビナカボソタマムシ(1).ミドリツヤナガタマムシ Agrilus insuspectus(1)．本種は県下では中央部から北にいる種のようでそう個体数が多くないようである。ヒメヒラタタマムシ(1)．ソーダーズチビタマムシ(1)．

○ コメツキムシ科　　Elateridae

ヒメクロツヤハダコメツキ(1)．チャイロコメツキ(1)．ムネアカクロコメツキ Ischnodes sanguinicollis(1)，本種の県下での記録は余り多くない。

○ ホタルモドキ科　　Drilidae

ホソホタルモドキ(2)．

○ ホタル科　　Lampyridae

オバボタル(3)．

○ ジョウカイボン科　　Cantharidae

クロズコバネジョウカイ(1)．

○ ベニボタル科　　Lycidae

ベニボタル(40)．ノリウツギの花上に極めて多く交尾中のものも割合見られた。

○ カッコウムシ科　　Cleridae

ムナグロナガカッコウムシ Opilo niponicus(1)．本種は兵庫県下での記録は案外と少い。

○ ケシキスイ科　　Nitidulidae

ムネアカチビケシキスイ(1)．キベリチビケシキスイ(2)．クロハナケシキスイ(1)．マメヒラタケシキスイ(1)．

○ コメツキモドキ科　　Languriidae

ツマグロヒメコメツキモドキ(1)．

○ テントウムシ科　　Coccinellidae

クビアカヒメテントウ(1). セスジヒメテントウ Nephus patagiatus (1), 本種は県下での記録は少い。ナナホシテントウ(1). テントウムシ(1).

○ ゴミムシダマシ科　　Tenebrionidae

ニジゴミムシダマシ(2). キマワリ(2).

○ ハムシダマシ科　　Lagriidae

スジコガシラゴミムシダマシ(1).

○ クチキムシ科　　Alleculidae

オオクチキムシ(1). ツヤバネヒメクチキムシ(1). キイロクチキムシ(8), 本種はノリウツギの花に多く来ている。

○ チビキカワムシ科　　Salpingidae

ムネマルチビキカワムシ(1).

○ ナガクチキムシ科　　Melandryidae

アオオビナガクチキムシ(1).

○ オオハナノミ科　　Rhipiphoridae

オスグロオオハナノミ　　Macrosiagon cyaniveste(1♂, 1♀), ノリウツギの花上より. 本種も県下の記録はそう多くない。

○ ハナノミ科　　Mordellidae

オオキボシハナノミ Hoshihananomia auromaculata (2). オナガクロハナノミ Mordella onaga (2). 共に県下からは初記録となる。このグループの県下での調査はほとんどないのが現状である。トゲナシヒメハナノミ(2).

○ カミキリモドキ科　　Oedemeridae

シリナガカミキリモドキ(1). キバネカミキリモドキ(2). キイロカミキリモドキ(11). いずれもノリウツギの花上にて得る。特にキイロカミキリモドキは多くいた。

○ カミキリムシ科　　Cerambycidae

ノコギリカミキリ(1). ツヤケシハナカミキリ(2). ニンフハナカミキリ(6). マルガタハナカミキリ Judolidia cometes (4). ヨツスジハナカミキリ(24). ヒゲジロハナカミキリ(1). エグリトラカミキリ(15). ホソトラカミキリ(1). キイロトラカミキリ(2). クスベニカミキリ Pyrestes

haematicus (1). アトジロサビカミキリ(1). ラミーカミキリ(1). 道端にカラムシが大変多いので本種がいると注意して見たが僅か1頭しか得られなかったし他に逃がしたのが2頭程いた。若干時期が遅かったのかもしれない。

シラホシカミキリ(5). リンゴカミキリ(1). ヘリグロリンゴカミキリ(2). カミキリムシ科の場合その大部分をノリウツギの花で採集した。特にヨツスジハナカミキリ, エグリトラカミキリは多くいた。このあたり材木を倒して置いてあるような所が全く見られなかった。大変手入の行き届いた山地帯でその意味では採集ポイントの発見が出来なく大変少い結果に終っている。

○ ハムシ科　　Chrysomelidae

バラルリツツハムシ(3). オオクロスジツツハムシ Cryptocephalus scitulus (6). カシワの葉のつけ根あたり注意して見ると割合多く産することが見られた。

クロボシツツハムシ(1). ドウガネツヤハムシ(3). ドロノキハムシ(1). フジハムシ(1). ムナグロツヤハムシ(4). キアシノミハムシ(4). サメハダツブノミハムシ(2). クロルリトゲハムシ Rhadinosa nigrocyanea (1). 砥の峯には多産するがその他の地域では必ずしも多く産する種ではなさそうである。

○ オトシブミ科　　Attelabidae

チャイロチョツキリ(3). カシルリオトシブミ(1). ゴマダラオトシブミ(1). セアカヒメオトシブミ(1). ヒメクロオトシブミ(1).

○ ホソクチゾウムシ科　　Apionidae

マメホソクチゾウムシ Apion collare (1).

○ ゾウムシ科　　Curculionidae

ハダカヒゲボソゾウムシ(1). ウスイロヒゲボソゾウムシ(1). シロコブゾウムシ(2). ヒメシロコブゾウムシ(2). コフキゾウムシ(1). オジロアシナガゾウムシ(1). タデサルゾウムシ(1). リンゴノミゾウムシ(1). チビデオゾウムシ(3).

以上で水谷地域の甲虫類の産出種96種を報告した。始めに記したようにほんのファウナの片鱗を見た程度であるが県下で始めての記録としての意義はあると思われる。

(IX. 1981).

県関係文献紹介

○ 神戸市，舞子ゴルフ場代替施設建設事業　環境影響評価書．B5，199P．1981年9月刊．

一般に手にすることが難しい文献である。表題のごとく舞子ゴルフ場を移転する押部谷町木見地区の環境調査報告書である。昆虫に就いては私も調査をさせて頂いた，その結果がこの報告の中にふくまれている。

○ 田中　梓，こうべ自然誌，　B6，212P．（のじぎく文庫），1981年10月刊．

本会々員，田中教授の著書である。主としてお勤めの関係から再度山を中心とした六甲山系における観察をまとめられた随筆風の読みものである。このような文章を軽妙洒脱と云うのである。文章の書き方をおゝいに教えられると共に一気に読み終えられる。兎に角楽しい。それと直筆のイラストの上手なことたゞ驚きである。是非皆さんもお読みになることをおすゝめする（1冊1,000円で書店にて販売）。

○ 永井正身，朝来郡朝来町奥多々良木ダム・黒川ダム動物相調査報告（昆虫類）．環境科学㈱．A4 8P．

著者永井氏の御好意で一般に入手出来ないこの報告書を御恵送頂いた。兵庫県下ではほとんど昆虫相の報告の無い地域だけに大変貴重である。8目45科110種が記録されている。調査期間が短くまた時期的に良くなかったので（1981年8月2，3日の調査）特に変ったものは含まれていない。

○ 西村　登，円山川中流域におけるヒゲナガカワトビケラ科2種の分布，金沢大学日本海域研究所報告，広13，PP．67～78．

表題のごとく円山川の中流域9地点でのニッポンヒゲナガカワトビケラとチャバネヒゲナガカワトビケラの分布調査の結果である。一般にこの文献も余り入手出来ないと思う。御恵送頂いた著者西村氏に御礼申しあげる。

○ 淡路自然研究保護連合会編．煙島の自然．B5，124P．

本年1月12日の神戸新聞紙上で本書出版の紹介が発表され早速編者の登日邦明氏に御無理を御願いして御恵送頂くことが出来た。同氏に対して厚く御礼を申しあげさせて頂き度く。兵庫県下では余り訪れる機会を持てない島の自然の紹介を総アートの立派な本にまとめ上げられている。編者の登日氏を始め執筆，写真撮影，作図者の皆様の御努力に心から敬意を表したいと思う。昆虫に就いても特に直翅類には面白いものがいるようだし，甲虫では県下初記録と思われるセスジゴミムシダマシがい

る。この様に次々と淡路島の自然も解明されて行くことは大変うれしいことである。

同　好　会　誌

○ Parnassius, №25. Insect, №26, Sept. 1981.（淡路昆虫同好会）.

○ MDK NEWS, Vol. 30, №82, Sept. 1981. Vol. 31, №83, Dec. 1981.（虫同友会）.

○ IRATSUME, №5, Sept. 1981（但馬むしの会）.

○ てんとうむし, №7, Dec. 1981（姫路昆虫同好会）.

○ Crude, №22, Dec. 1981（大阪昆虫同好会）.

○ 兵庫陸水生物同好会, №4, 5, 1981, VI, 1982, I.

（T.）

昭和56年度収支報告書

自 昭和56年 1月 1日
至 昭和56年12月31日

収入の部		支出の部	
	円		円
繰越金	80,340	きべりはむし	
		Vol. 9. 仏1 印刷代	115,000
会費	176,000	Vol. 9. 仏2 印刷代	99,750
バックナンバー代	48,000	郵送料	37,940
		事務用品	2,010
		次期繰越金	49,640
合計	304,340	合計	304,340

○交　換　誌

下記交換誌が送られてきております。本部に保管していますので御利用下さい。

山陰むしの会連絡誌，№15～18．

のせ（大阪昆虫同好会連絡誌）．

Vol. 8，№1．Vol. 9，№3～7．Vol. 10，№1～3，6，7．

crude，№22（大阪昆虫同好会）．

編　集　後　記

○ ″きべりはむし″ Vol．１０，№1をお届け致します。兵庫昆虫同好会も設立以来１０年経過したのだなァと感無量です。本来なら１０周年記念号でも出版出来ればいゝのですが何んとしても原稿難，資金難で実現出来ず申し訳御座いません。しかし乍ら本号はお陰で可成り充実した内容で発行出来たと思っています。御投稿下さった皆様に厚く御礼申しあげます。

○ 手持ち原稿は零です。毎号原稿無しからヒヤヒヤしながら出発です。長短にかゝわらず御投稿下さい。次号は１１月に発行したいと思います。尚原稿は是非原稿用紙に書いて下さい（次号原稿締切9月末）。

○ 兵庫昆虫同好会もそろそろ世代交替の時期だと思います。誰方か″きべりはむし″出版を引き受けたと云う方の出現を大いに望んでいます。我と思われる方は名乗り出て下さい。いつまでも同じ者が編集していたのではいけないと考えます。

○ 丁度採集の好期に入っております。皆様方の大いなる御健斗を御祈り致します。　　（T.）

きべりはむし　第10巻第1号

昭和57年5月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652　神戸市兵庫区氷室町1丁目44　高橋寿郎方

印刷：㈱文尚堂

〒652　神戸市兵庫区下沢通3丁目4－11